

博士学位論文

並列表現の史的展開と諸相  
—引用・疑問形式由来の「トカ」「トヤラ」を中心に—

令和7年5月

姫 宇恒  
75430108

岡山大学大学院  
社会文化科学研究科  
博士後期課程  
社会文化学専攻  
人間社会科学講座

## 目次

<b>序章</b> .....	<b>4</b>
1. 本研究の目的.....	4
2. 並列表現の研究史.....	6
3. 「トカ」「カ」「トヤラ」「ヤラ」の先行研究について.....	9
4. 本研究の立場.....	14
5. 本論文の構成.....	14
<b>第一章 並列形式「トカ」の史的展開</b> .....	<b>15</b>
1. はじめに .....	15
2. 先行研究 .....	18
3. 「トカ」の意味用法の展開.....	19
4. 「トカ」の後続形式の展開.....	28
5. 中世・近世における「トカ」の使用文脈.....	36
6. おわりに .....	39
<b>第二章 並列形式「トヤラ（ン）」の史的展開</b> .....	<b>40</b>
1. はじめに .....	40
2. 先行研究 .....	44
3. 「トヤラ（ン）」の意味用法の展開.....	46
4. 「トヤラ（ン）」の後続形式の展開.....	51
5. 「A トヤラ何トヤラ」形式について.....	55
6. おわりに .....	56
<b>第三章 並列形式「トヤラ（ン）」と「ヤラ（ン）」の関係について</b> .....	<b>57</b>
1. はじめに .....	57
2. 各時期における「ヤラ（ン）」と「トヤラ（ン）」展開の関係 .....	60
3. おわりに .....	66
<b>終章</b> .....	<b>70</b>
1. 本研究が明らかにしたこと.....	70
2. 補説一「トカ」「トヤラ（ン）」の単独用法について一.....	71

3. 今後の課題 .....	74
参考文献 .....	76

## 序 章

### 1. 本研究の目的

現代語には、(1) (2) に示す「太郎と次郎」「本を読んだり、買い物に出かけたり」のような表現がある。岩田(2021)<sup>1</sup>では、(1) (2) のような2つ以上の名詞句または述語句が、統語的に対等な性質<sup>2</sup>を持ち接続されるものを並列表現としている。本研究で言う並列表現も、この定義に従う。

- (1) <sup>3</sup>教室に太郎と次郎がいた。  
(2) 日曜日には、本を読んだり、買い物に出かけたりした。

並列表現の中には、(3) (4) のような「～トカ～トカ」がある。

- (3) …当分、夜はアルコールとか薬とか、意識を失いやすくなるものは口にしないことね。 (『R-0 amour』 柴田よしき・祥伝社 2001)  
(4) 顔つきは優しく、縮れつ毛で、アンドリューとかアンドリュースとかいう名前だったが、ベンにはそれがファーストネームなのかラストネームなのかわからなかった。 (『炎の記憶』リドリー・ピアソン(著)/橋本夕子(訳)・角川書店 2002)

用例(3)では、「A トカ B トカ」にN<sup>4</sup>「意識を失いやすくなるもの」が後続する。N「意識を失いやすくなるもの」は一つの集合体であり、A「アルコール」とB「薬」はN「意識を失いやすくなるもの」の二つの具体例であるが、AとB以外の要素(意識を失いやすくなるもの)の存在が考えられる。この例において、「A トカ B トカ」は集合体の具体例を挙げる用法である。

用例(4)では、「A トカ B トカ+イウN」の形式で、ある人の名前がはつきりと分からぬが、その可能性のあるもの、A「アンドリュー」とB「アンドリュース」を挙げている。この例において、「A トカ B トカ」ははつきりと分からぬものとして候補を挙げる用法である。

<sup>1</sup> 岩田美穂(2021)「並列表現」『日本語文法史キーワード辞典』ひつじ書房

<sup>2</sup> 岩田(2021)によると、統語的に対等な性質とは、名詞並列の場合、並列される要素はいずれも同じ格関係で等しく述語と結びつくこと(1)、述語句並列の場合、並列される事態同士が、継起、因果、条件などの時間的前後関係がなく、「する」を伴い複合的な述語を形成すること(2)を指す。

<sup>3</sup> (1) (2) は岩田(2021)による。引用に際して例文番号を変更した。

<sup>4</sup> Nは名詞・名詞相当のものを表す。

(3) と (4) の相違点については、(3) では、話者・筆者は集合体N「意識を失いやくなるもの」を意識して、その中から具体例を取り出しているのに対して、(4) では、話者・筆者ははっきりと分からぬもの、可能性のあるものを挙げている。(3) のようにある集合体を意識して、その中から具体例を取り出すのではない。

挙げられた要素以外のものがあるかどうかという視点から見ると、(3) の「A トカ B トカ」は集合体から具体例を取り出す用法であるから、A と B 以外の要素が存在する。(4) の「A トカ B トカ」ははっきりと分からぬものの候補を挙げていることから、A と B 以外の要素は存在しても存在しなくてもよいと考えられる。実際の名前は A である可能性がある。B である可能性もある。そして、A と B のどちらでもない、ほかの類する名前である可能性もある。

現代語の「トカ」は大きく、(3) のような集合体から具体例を取り出す用法と (4) のようなはっきりと分からぬものの候補を挙げる用法がある<sup>5</sup>。岩田 (2010) によると (3) のような「トカ」と (5) ~ (8) の「タリ」「ナリ」「ノ・ダノ」「ヤラ」は、「複数想定される要素のうちのいくつかを任意に取り出して述べる」という例示の意味を持ち、「基本的に取り上げる要素の一つ一つに形式を付加しなければならず、さらに、句が並立して用いられる」、「並列句が名詞句相当として動詞の項になり、また、動名詞相当として形式動詞「スル」を伴い述語にもなる」という共通の特徴がある。これらの五形式を「例示並列形式」と定義した。

(5) <sup>6</sup>太郎は、日曜には、本を読んだり買い物に行ったりする。

(6) 太郎は、参考書を読むなり、塾に行くなりしないといけない。

(7) 太郎は、日曜には、寝るだのテレビを見るだのしてばかりいる。

(8) 太郎は、泣くやらわめくやらしていた。

並列表現の史的な展開を見ると、(9)<sup>7</sup>のような一時的に出現した「トヤラ」も岩田 (2010) が指摘している「例示並列形式」の特徴を持っている<sup>8</sup>。

<sup>5</sup> そのほか次の①のような形式が固定し（肯定一否定）、伝聞を表す用法も見られる。

①話によると、S m C 内部でも、古参の刺青組と新参の焼印組との間には、軋轢があるとかないとか。そうはいっても、どちらも人間社会の膾や灑みたいな連中だ。似た者同士に違いない。そして、この国、特にこのエルデンには、そういう人種が掃いて捨てるほどいる。（十文字青『薔薇のマリア』角川書店 2005）

<sup>6</sup> (5) ~ (8) の例は岩田 (2010) による。引用に際して例文番号を変更した。

<sup>7</sup> 本研究は中納言『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を調査し、この一例の「～トヤラ～トヤラ」しか見られない（検索条件は短単位検索で、キーを「品詞が助詞 AND 語彙素読みがヤラ」、前方共起 1 を「品詞が助詞 AND 語彙素読みがト」に設定した）。この例は会話文で、宗右衛門という人物の発話である。古い歴史の舞台で行われた会話と考えられる。したがって、この例は現代語の用法ではないと考えられる。この例の意味用法を考えると、「～トヤラ～トヤラ+言イフ拉斯」の形式で、発話の具体例

「笹川の主人は身分がいやしい」「（笹川の主人は）吝嗇」「（笹川の主人は）得体の知れない人間だ」を挙げている。

<sup>8</sup> 並列形式「トヤラ」の意味用法と文型は第 2 章で詳しく記述する。

(9) さし当って困ることは界隈の料理屋仲間が、わたしの足を引っ張ろうとたくらんだことかも知れないが、笹川の主人は身分がいやしいとやら吝嗇とやら、得体の知れない人間だとやら言いふらしている。 (『桃色月夜』梅本育子・集英社 1991)

例示並列形式「トカ」「トヤラ」は語源的には引用の「ト」+疑問の「カ」／「ヤラ」のように、「引用+疑問」形式のものである。その意味用法を見ると、(3)のような例示用法と(4)のような「はっきりと分からぬものの候補を挙げる」用法の両方を持っている。例示用法を獲得する時期において、「はっきりと分からぬものの候補を挙げる」用法も見られる<sup>9</sup>。「はっきりと分からぬものの候補を挙げる」用法においては、AとB以外の要素の存在が可能である。その点で、集合体の一部を挙げる例示用法の発生に關係する可能性がある<sup>10</sup>。

①「引用+疑問」の形式、②例示と「はっきりと分からぬものの候補を挙げる」用法を持つ、③「はっきりと分からぬものの候補を挙げる」用法が例示用法の発生に關係する可能性がある<sup>11</sup>という三つの特徴を持つことから、例示並列形式の中の「トカ」と「トヤラ」を一つのグループに分類できる。本研究は並列形式「トカ」「トヤラ」の展開を明らかにすることを目的とする。

## 2. 並列表現の研究史<sup>12</sup>

並立助詞という助詞の分類を初めて設けたのは橋本進吉である<sup>13</sup>。橋本は『國語法研究』(岩波書店 1948)において、並立助詞の例として「ト」「ヤ」「ヤラ」「ニ」「カ」「ナリ」「ダノ」を挙げ、「あれとこれと」「酒やびーるや」「酒にビール」の如く、對等の關係に立つ語を接續せしめるもの」と説明している。

渡辺(1971)では、並列成分という成分を認め、それをさらに並立助詞、並列形、並列

<sup>9</sup> 並列形式「トヤラ」は江戸前期において、「はっきりと分からぬものの候補を挙げる」用法から例示用法への拡張が見られる。並列形式「トカ」は江戸後期において「はっきりと分からぬものの候補を挙げる」用法と例示用法がほぼ同時に見られる。

<sup>10</sup> 例示並列形式「タリ」も例示用法と異なる、「行ったり来たり」のような反復の意味を表す用法が見られるが、京(2016)の考察によると、「タリ」は中世前期から、「みな人は重き鎧のうへに、重き物を負うたりいだいたりして入ればこそ沈め、この人親子はさもし給はぬうへ、なまじひにくッきやうの水練にておはしければ、沈みもやり給ず。(平家物語・能登殿最期)」のような例示並列用法が見られはじめ、江戸期以降、「ふとんのうへに寐たり起たり手をたゝいてもあいともいはず(駅舎三友)」のような反復並列用法が見られるようになる。したがって、「タリ」の反復用法は例示用法の発生に影響を与えていないと考えられる。

<sup>11</sup> 第一、二章で詳しく記述する。

<sup>12</sup> 岩田(2010)でも並列表現の研究史が整理されている。本研究では岩田(2010)の記述を参照しつつ、本研究独自の観点から研究史の整理を試みる。

<sup>13</sup> 『日本文法大辞典』(松村明(編)明治書院 1971)、『日本文法事典』(北原保雄、鈴木丹士郎、武田孝、増淵恒吉、山口佳紀(編)有精堂出版 1981)などを参照。

副詞に分類した。並列助詞について、渡辺は(10)～(12)のような例を挙げ、「「と・や・やら・に・か・なり・の・だの」の類で、体言またはこれに準ずるもの、例えば、連体形をとて体言化・素材化した用言、と結合して並列成分を作る」と説明している。並列形について、渡辺は(13)～(16)のような例を挙げ、「並列展叙を託される活用形」と説明し、さらに「典型的並列」((13)(14))と「継起的並列」((15)(16))に分けられると指摘している。並列副詞について、渡辺は(17)(18)のような例を挙げ、「並列展叙を託される副詞」と説明し、さらに「典型的並列副詞」(17)と「継起的並列副詞」(18)に分けられると指摘している。

- (10) <sup>14</sup>桜と梅が植えてある。
- (11) 三時か三時半頃が結構です。
- (12) 焼くなり煮るなりした方がよからう。
- (13) 新聞を読み、ラジオを聞く。
- (14) 新聞を読んで、ラジオを聞く。
- (15) 新聞を読み、世論の動向を知る。
- (16) 新聞を読んで、世論の動向を知る。
- (17) 新聞を読み、かつラジオを聞く。
- (18) 新聞を読んで、そこで世論の動向を知る。

寺村(1991)では、「二つあるいはそれ以上の名詞、形容詞、動詞、(名詞+)判定詞を平等の資格で結びつけて、全体としてその文中の一つの構成要素とする」ことを並立的結合と定義し、さらに「名詞の並立的結合」(「ト」、「ヤ」、「カ」など)と「述語の並立的結合」(「連用形」、「テ形」、「タリ形」など)に分類し、表1に示すように数多くの形式があることを指摘した。また、全部例挙(「ト」など)、一部例挙(「ヤ」など)、一部例示(「トカ」など)の用法があることを指摘した。

表1<sup>15</sup> 並立的結合の分類

名詞の並立的結合	ト、ヤ、コンマ、ニ、モ、カ、トカ、ヤラ、ダノ、ニシロ、トイ イ、ナリ、ダカ
述語の並立的結合	連用形、テ形、タリ形、「～スル、～スル」、「～スルハ、～スル ハ」、「～スルトカ」、「～スルヤラ」、「～スルダノ」、「～ノ」「～ スルニシロ(セヨ)」

<sup>14</sup> (10)～(18)の例は渡辺(1971)による。引用に際して例文番号を変更した。

<sup>15</sup> 表1は寺村(1991)の記述を参考し、作成した表である。

森山（1995）では、寺村（1991）の記述を踏まえ、(19) のように「スル」を伴って複合的な述語となる「タリ」「トカ」「カ」「ナリ」を「並列述語構文」と定義し、並列述語構文とその周辺を考察した。また、「タリ」を「結合的並列」、「トカ」「カ」「ナリ」を「候補的並列」、「シ」「テ形」を「交差的並列」と呼んで、意味のタイプを説明した<sup>16</sup>。

(19) <sup>17</sup>女中に重いものを与えたり親戚へ軽いものを贈ったりして軽蔑の種にされた。  
(友よ)

中俣（2015）では、寺村（1991）、森山（1995）などを踏まえ、現代語における並列表現の体系を「並列助詞」（「ト」、「ヤ」、「モ」など）、「並列を表す接続助詞」（「バ」、「シ」、「テ」など）、「並列を表す接続詞」（「ソレカラ」、「ソシテ」、「マタ」など）に分け、各形式について統語レベル、意味レベル、語用レベルでその用法を記述した。統語レベルでは、それぞれの並列マーカーが要素と要素をどのように結びつけるかについて記述し、意味レベルでは、集合の形成動機について記述し、語用レベルでは、「他にはない」という排他的推意の有無について記述している。

並列表現の歴史的展開については、個別の表現の記述的な研究がいくつか見られる。例えば、疑問の助詞が関係する「カ」「トカ」「ヤラ」については、衣畠・岩田（2010）、岩田・衣畠（2011）、岩田（2014）、衣畠（2022）などがある。また、活用語終止形に関与する「ナリ」「タリ」については、岩田（2007）、京（2014）、京（2016）などがある。体系的な研究としては、此島（1966）、岩田（2010）があり、此島（1966）では、橋本の分類を踏まえ、「並立助詞」という章で、「と」「か」「やら」「や」「の」「だの」「なり」「たり」「し」を挙げ、それぞれの古代から現代の意味用法を記述した。また、岩田（2010）では、此島（1966）、寺村（1991）、森山（1995）などを踏まえ、「複数の語句が対等な関係で文中に並べられること」を「並列」と定義し、さらに、例示用法に注目して、「タリ」「ナリ」「ノ・ダノ」「ヤラ」「トカ」という「例示並列形式」の歴史的展開過程を考察した。岩田の結論は表2のようにまとめられる。

---

<sup>16</sup> 森山（1995）では、「結合的並列」を「複数場面を結合させる並列関係」、「候補的並列」を「適切な表現内容の構成のための候補例を挙げる」、「交差的並列」を「同時に両要素を満足する並列関係」と説明している。

<sup>17</sup> (19) は森山（1995）による。引用に際して例文番号を変更した。

表2<sup>18</sup> 岩田（2010）における例示並列形式の構文的な変遷の過程

	述語句としての用法を中心として発達した	名詞句としての用法を中心として発達した
文末辞を由来とし、注釈句となる用法を経るもの	タリ	ナリ、ヤラ
引用句を基盤にして用法が拡大していくもの		ノ・ダノ、トカ

### 3. 「トカ」「カ」「トヤラ」「ヤラ」の先行研究について

本研究で取り上げる「トカ」についての先行研究としては、此島（1966）、岩田（2014）などが挙げられる。「カ」の研究は、此島（1966）、衣畑・岩田（2010）、衣畑（2022）などが挙げられる。「トヤラ」についての研究は、管見の限りまだ見られない。「ヤラ」についての研究としては、此島（1966）、衣畑（2007）、岩田・衣畑（2011）などが挙げられる。

「トカ」「カ」「トヤラ」「ヤラ」の史的展開を全体的に見ると、疑問用法から並列用法（選言／例示）への展開過程が見られる。以下、それに関連する先行研究を取り上げる。

#### 3-1 「カ」「トカ」について

##### 3-1-1 「カ」について

「カ」における疑問用法から並列用法への展開過程についての研究としては、此島（1966）や衣畑・岩田（2010）が挙げられる。

此島（1966）では、助詞「カ」について、(20)～(27)の用例を挙げ、「並列される二つ以上の事物から一つを択ぶ意を表す」「現代語から古代までその用例を求めることができる」と述べている。

(20) <sup>19</sup>さめたものは、雪平でか小鍋でかお温よ (春色梅児誉美・一七)

(21) 十六錢や二十四錢の紅粉は、二日か三日になめてしまひます (浮世風呂・三上)

(22) 今日か明日は戻られふ (博多小女郎浪枕・中)

(23) 伊勢の御師かなんぞの様に、白大夫とお付けなされたを…… (菅原伝授手習鑑・第三)

(24) 百姓ハケコカ下部カノヤウニナルソ (史記抄・十四)

<sup>18</sup> 表2は岩田（2010）の結論を参照し、作成した表である。

<sup>19</sup> (20)～(29)は此島（1966）による。引用に際して例文番号を変更した。

- (25) 我病カ父ノ喪カナントテ無テハユルサレマイ (古文真宝抄・十)  
 (26) 陰陽の習カ若は真言の習カ聞伝へたる術ありとて (沙石集・八・第十四)  
 (27) 村上カ朱雀院カ生れおはしましたる御五十日のおもちひ…… (大鏡・醍醐)

そして、「カ」の選言用法の発生の経緯について、此島（1966）は、(28) (29) のような用例を挙げ、「本来、事物を一つに決めることができないで、それに当たりそうなものを「あれか、これか」と疑いながら提出する表現から出発したもの」と述べ、それは「「か」の下で疑問文として終止しているのであるが、これが疑問の意を不定に転じて「そのいずれか一つ」と選択する意に変ると、並立の用法である。そうなると、下へ連続する関係で最後の「か」は脱落したり、あるいはまた、並列した後に「など」「なんか」を添えたりする用法も生ずる。」と説明している。

- (28) わが世をば、今日カ明日カと待つかひの涙の滝といづれ高けむ (伊勢物語・八七)  
 (29) かたへはおもひなしかをりからカとおぼして (源氏・蜻蛉)

衣畑・岩田（2010）は、此島（1966）を踏まえ、「～カ～（カ）」を構文的な条件から、「コピュラが後接」(30)、「ノが後接」(31)、「スルが後接」(32)、「名詞との共指示」(33)、「裸名詞」(34)、「助詞が後接」(35)、「格助詞が前接」(36)、「副詞的成分」(37)に分類し、その展開過程を考察して、次のような結論を得た。

- (30) <sup>20</sup>盜人カ、ばけものカであらふ. (虎明・中 126)  
 (31) 此ハ今外へ欲行者ハ可行歟不行歟ノコトソ (史記抄 17.52)  
 (32) 終則已トハ其人力死ヌルカウスルカスレハヤムルソ (史記抄 8.43)  
 (33) かみ入よりなにカ、かいたもの、をいたす (上方 16.210)  
 (34) どうで湯カ茶カ、飲みにであろ. (近松 2.163)  
 (35) 逃鳥カ水鳥をいてお目にかけう (虎明・上 383)  
 (36) いつからカ、着類を質に間を渡し. (近松 2.413)  
 (37) この酒一献飲ませたく、いくたびカ思ひ寄つたれど. (近松 2.368)

カは中古まではほぼ疑問の助詞として用いられており、その後少なくとも 14 世紀までに、文を並列するカで、選言と意識される用法が発生した。選言という意識が強くなると名詞を並列させることも可能になり（例えば Keenan & Faltz (1985)

<sup>20</sup> (30)～(37) は衣畑・岩田（2010）による。引用に際して例文番号を変更した。

参照<sup>21)</sup>），15世紀以降の文献に名詞句を並列する選言用法が見られるようになる。

その後、近世に入り、名詞句の位置では最後の力がない「NかN」という形が普通になった。

（衣畠・岩田 2010:8）

### 3-1-2 「トカ」について

「カ」の選言用法が発生した後「トカ」の選言用法も見られるようになる。「トカ」の展開に関する研究としては、此島（1966）や岩田（2014）が挙げられる。

此島（1966）では、「トカ」を「カ」の一部として記述している。まず、(38) (39) のように、引用の「ト」の下に「カ」の添う用法があり、(40) のように、「トカ」が一語化して、下の「言う」のような動詞なしに並立に用いられるようにもなったとしている。

(38) <sup>22)</sup>宇賀龍とか土蜘蛛とかいふものゝ押出し。 (浮世風呂・四下)

(39) 靈よカ厲よカセヨトアルホドニ…… (蒙求抄・十)

(40) 酵素を主体とする生化学的連鎖反応であるとすると、当然酵素の生成とか色々の形質との相関とかが考えられ…… (「現代語の助詞・助動詞」一一九ペ)

岩田（2014）は、此島（1966）を踏まえ、「トカ」の史的変遷について、上代から現代までの用例を調査し、その変遷過程を記述した。岩田によると、8世紀頃から、「トカ」は疑問（係り）として使用されていた（41）。その後遅くとも11世紀までには伝聞の用法が成立した（42）。15世紀頃から助詞「カ」の影響をうけて、「トカ」は選言用法が見られるようになる（43）。その後、18世紀後半から19世紀にかけて選言用法からの派生として例示が発生する（44）とした。

(41) <sup>23)</sup>海原の沖行く船を帰れとか領巾振らしけむ松浦佐用姫 (万葉 3. 252)

(42) いとあやしき、梵字とかいふやうなる跡に侍めれど、 (源氏 3. 296)

(43) 靈トカ厲トカセヨトアルホドニ (蒙求 10. 9 ウ)

(44) 今日帰ると造作とか戸棚とかを買って仕舞ますヨ (春色梅児誉美 100)

### 3-2 「ヤラ」について

「ヤラ」の疑問用法から並列用法への展開過程についての研究としては、此島（1966）岩田・衣畠（2011）が挙げられる。

<sup>21)</sup> Edward L. Keenan and Leonard M. Faltz, *Boolean semantics for natural language*. Dordrecht: Reidel, 1985

<sup>22)</sup> (38)～(40)の用例は此島（1966）による。引用に際して例文番号を変更した。

<sup>23)</sup> (41)～(44)の用例は岩田（2014）による。引用に際して例文番号を変更した。

此島(1966)では、並列形式「ヤラ」の意味用法には二つのタイプがあると指摘している。江戸時代以前には(45)のように、疑問・不定の意を含んで使われていた<sup>24</sup>。江戸時代に入つてから、(46)～(48)のように、並列したどれをも肯定するという新しい用法が見られると述べている。

- (45) <sup>25</sup>焼クルホドニ烟ヤラ浪ヤラ天ニ漲ルソ (中華若木詩抄・上)
- (46) お姫様は、おどろきやらうれしさやらはずかしさで、夢心地でした。  
(「現代語の助詞・助動詞」227 ペ)
- (47) 出来た所が、塩梅が悪いやら、手際が悪いやらで、ヤンヤという程にも行かねへ  
(浮世床)
- (48) どうやら斯うやら間を合わせました (好色伝授・中)

岩田・衣畑(2011)では、(49)のような直接疑問、(50)のような不定、(51)のような間接疑問の「ヤラ」と(52)のような「ヤラ」の例示用法の関係について考察し、「～ヤラ～ヤラ」の例示用法は直接疑問から派生し、18世紀前半に成立したと結論づけている。

- (49) <sup>26</sup>何を思つてそんなことを言ったのやら。
- (50) 何やらへんな音がする。
- (51) 何があるのやら、わからない。
- (52) 太郎やら次郎やらが来た。

「ヤラ」の例示用法の成立時期について、岩田・衣畑(2011)では「ヤラ」の意味的特徴をi)、ii)、iii)に分類し、i)が安定的に使われるようになる時期を確認して、「ヤラ」の例示用法の成立時期が18世紀前半であることを明らかにした。

i) 話者が並列される事態の両方(不定詞の場合は片方)が真であることを直接知つて  
いる例

(53) そばで泣くやらわめくやら。行き来も止まるばかりなり。 (卯月紅葉, 2. 100)

ii) 話者が並列される事態の両方(不定詞の場合は片方)が真であることを直接知ら  
ない例

<sup>24</sup>『室町時代言語の研究』(風間書房 1970)では、(45)の意味を「烟か浪か定かならぬものが、天に漲る」と解釈している。

<sup>25</sup> (45)～(48)の用例は此島(1966)による。引用に際して例文番号を変更した。

<sup>26</sup> (49)～(57)の用例は岩田・衣畑(2011)による。引用に際して例文番号を変更した。

(54) お前のお頼みなされたやら、どうしたやら存ぜねども。 (大経師昔歴, 2. 545)

iii) 文脈からは i とも ii とも判断できない例

(55) 身は濡鼠、腹立つやら、をかしいやら。挨拶もせず、 (女殺油地獄, 1. 220)

岩田・衣畑 (2011) は、「ヤラ」の例示用法は 18 世紀前半には文末 (56)、注釈 (57) で多用されており、これは直接疑問が文末・注釈で使われるという特徴と一致することから、直接疑問から派生したと結論づけた。

(56) 田舎の客が身請けのこと、…理屈をつめてねだれごと。腹が立つやら、憎いやら。

とはいひながら、これは先。忠兵衛様は後手といひ、 (冥土の飛脚, 1. 124)

(57) 八助は寒いやら寝むたいやら、小ひだるいやら、むしゃくしゃ腹を立、

(軽口片頬笑, 8. 322)

直接疑問、不定、間接疑問の意味的な特徴について、岩田・衣畑 (2011) では、次のように説明している。

直接疑問・不定・間接疑問はいずれも命題が両方成り立つことを含意しない。「田中が来たやら山田が来たやら」が直接疑問として発話された場合に「田中がきた」「山田がきた」という命題のどちらについても、成立するかどうかわかつていてないことを意味する。「誰やらが来た」という不定は、田中か山田かその他の人物かのいずれかの人物がきたということであり、全ての命題が成立することを意味しない。ヤラによる間接疑問は、時代を通じて、述語が「知らない」「わからない」など「未決」を意味するものに限られるという特徴がある。 (岩田・衣畑 2011: 65)

以上の先行研究から分かるように、「トカ」は中世後期から近世前期において「カ」の影響を受けて、選言用法を獲得した。その後、挙げられた要素以外の要素が存在するという例示用法が発生した。

「トヤラ」についての先行研究は見られないが、用例として、近世を中心に一時的に出現している。この時期は、以上の先行研究が指摘しているように、「ヤラ」が例示用法を獲得する時期である。こうした「トヤラ」「ヤラ」の関係についても考察する必要があると考えられる。

本研究では、意味と文型の面で、「トカ」「トヤラ」の史的展開を記述した上で、「トヤラ」と「ヤラ」の関係を考察する。

#### 4. 本研究の立場

本研究では、岩田（2021）に従い、「2つ以上の名詞句または述語句が、統語的に対等な性質を持ち接続されるもの」を並列表現と呼び、(58)～(61)のような「～トカ～トカ」「～トヤラ（ン）～トヤラ（ン）」「～カ～カ」「～ヤラ（ン）～ヤラ（ン）」を考察対象とする。また、並列表現に現れる「トカ」、「トヤラ（ン）」、「カ」、「ヤラ（ン）」を並列形式と呼ぶ。

本研究の考察対象となる並列形式「トカ」の「トカ」は語源的には引用の「ト」と疑問の「カ」から成り立っている。此島（1966）は、「トカ」には「引用の「ト」の下に「カ」の添う」用法と「一語化」した用法があると指摘している。本研究でも、並列形式「トカ」の成立には一語化の過程があったと考え、「ト+カ」から「トカ」への展開過程を考察する。

(58) 我死ナバ。ワルキ。ヲクリ名デ。アラウズ。靈ト謚スルカ。又厲ト謚ヲスルカ。  
セヨト云ソ。靈モ厲モ惡キ謚ソ。好イ謚ヲセイト。云ハイテ。惡キ謚ヲ。セヨト。  
イワレタカ。共デヨイトテ。共主ト子囊ガ。ハカラウテ。謚ンタソ。コヽデ。大  
夫ハ君命テ。靈トカ。厲トカ。セヨト。アルホドニ。

（蒙求抄・10.9 ウ・中世後期）

(59) 熊野へ参詣する人あり。岩のかけぢを、たごしとやらん又あをだとやらんいふに  
のせて、かゝれたるが、谷のふかき事、千ひろもあらんを見やり、さても一足ふ  
ミそこなふたらハ、五軀ハ微塵にならん物よといひけり。 (醒睡笑 2. 168・1623)

(60) 何条さる事のあるべきぞ。八郎が義朝をおどさんとて、籌にぞしたるらん。その  
冠者、今年は十七か八かにぞなるらんと思ゆる。さまではやはつのるべき。鎮西  
育ちなれば、歩立ちはよかるらん。 (保元物語・白河殿攻め落す事・中世前期)

(61) 百千ノ船ドモニ火ガ付イテ焼クルホドニ、烟ヤラ浪ヤラ天ニ漲ルソ。

（中華若木詩抄. 9・中世後期）

#### 5. 本論文の構成

本論文は、序章・本論・終章で構成され、本論は三章に分かれる。第一章と第二章では、それぞれ、「トカ」と「トヤラ（ン）」の歴史的な展開過程を考察する。第三章では、「トヤラ」と「ヤラ」の関係について考察する。結論では、本研究が明らかにしたことをまとめ、今後の課題を述べる。

## 第一章 並列形式「トカ」の史的展開

### 1. はじめに

「トカ」の史的展開において、二つ（以上）の要素を挙げる並列用法は中世後期において初めて見られるようになる。具体例としては、（1）が挙げられる。序論で示したように、「トカ」は岩田（2010）が指摘する「例示並列形式」の一つであり、さらに、①疑問、②例示、③候補の用法を持つ。本章は並列形式「トカ」の史的展開過程を考察する。

具体的な考察の内容として、「トカ」の意味用法や後続形式の展開と一語化、そして、発生初期に見られる文脈の特徴を考察する。

（1）我死ナバ。ワルキ。ヲクリ名デ。アラウズ。靈ト謚スルカ。又厲ト謚ヲスルカ。  
セヨト云ソ。靈モ厲モ惡キ謚ソ。好イ謚ヲセイト。云ハイテ。惡キ謚ヲ。セヨト。  
イワレタカ。共デヨイトテ。共主ト子囊ガ。ハカラウテ。謚シタソ。コヽデ。大  
夫ハ君命テ。靈トカ。厲トカ。セヨト。アルホドニ。

（蒙求抄 10.9 ウ・中世後期）

用例の採取にあたっては、中納言『日本語歴史コーパス』、史記抄、蒙求抄、嘶本大系などの資料を利用した<sup>27</sup>。時代別にまとめると、以下のようになる。各資料における「トカ」の用例数を表1に示す。

上代…万葉集

中古…源氏物語

中世…保元物語、平治物語、平家物語、史記抄（『抄物資料集成』清文堂）、蒙求抄（『抄物大系』勉誠社）

近世…〔大蔵虎寛本狂言〕素袍落（『能狂言：大蔵虎寛本』岩波書店）

〔嘶本大系〕醒睡笑、一休闌東咄、宇喜藏主古今咄揃、初音草嘶大鑑、咲顔福の門、  
はつ鰯、笑の切り、百生瓢、落嘶年中行事、落嘶千里藪、梅屋集（『嘶

<sup>27</sup> 並列形式「トカ」の発生初期においての用法の展開をより精確に記述するため、近世期の用例は30年ごとにいくつかの用例を採取できるように、中納言『日本語歴史コーパス』のほか、嘶本大系、新編日本古典文学全集などから用例を採取した。『日本語歴史コーパス』において検索条件は短単位検索で、キーを「品詞が助詞 AND 語彙素読みがカ」、前方共起1を「品詞が助詞 AND 語彙素読みがト」に設定した。

本大系』東京堂出版)

[洒落本] 深川新話、阿蘭陀鏡、粹の曙、花街鑑

[滑稽本] 酷酊氣質、浮世床 (『新編日本古典文学全集』小学館)

[人情本] 明鳥後の正夢、春色梅児譽美、花廻志満台

現代…明六雑誌、東洋学芸雑誌、国民之友、太陽

表1 各資料における「トカ」の用例数<sup>28</sup>

形式	A ト カ	代 名 詞 + ト カ	A ト カ	A ト カ	A ト カ	A ト カ	A ト カ	A ト カ	A ト カ	A ト カ	A ト カ	何 ト カ
			ナ ン ド ゾ	B ト カ	B ト コ ソ	B ト コ ソ	何 ト カ	B ナ ド ／ ナ ン カ ／ ナ ン ゾ	B ナ ド ／ ナ ン カ ／ ナ ン ゾ	B ト カ	B ト カ	彼 ト カ
用例数												
出典												
万葉集(700年代)	26	11	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
源氏物語(1001～1010頃)	43	11	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
保元物語(中世前期)	1	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
平治物語(中世前期)	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
平家物語(中世前期)	3	10	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
史記抄(1477)	2	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
蒙求抄(中世後期)	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
醒睡笑(1623)	5	10	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0
一休闐東咄(1672)	0	2	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0
宇喜藏主古今咄揃(1678)	0	4	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
初音草嘶大鑑(1698)	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
咲顔福の門(1732)	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
深川新話(1779)	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0
はつ鰐(1781)	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0

<sup>28</sup> 「似るを友とかやの風情に、忠盛のすいたりければ、彼女房も優なりけり。(平家物語(中世前期))」のような「トカヤ」の例を除外した。「トカヤ」について、小田(2015)は「複合辞「とかや」(「か」は係助詞、「や」は間投助詞)は不確実な伝聞を表すが、やがて副助詞的に用いられた。」と述べている。従って、「トカヤ」全体を一語として見ることができる。「トカ」とは異なる形式である。

大蔵虎寛本狂言・素 袍落(1792) <sup>29</sup>	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0
笑の初り(1792)	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
阿蘭陀鏡(1798)	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0
酩酊氣質(1806)	4	1	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0
百生瓢(1813)	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
浮世床(1813～1814)	7	5	0	5	0	0	1	1	0	0	0	0
粹の曙(1820)	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0
明鳥後の正夢 (1821～1824)	12	2	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0
花街鑑(1822)	1	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0
春色梅児誉美 (1832～1833)	5	5	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0
落嘶年中行事(1836)	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
花廻志満台(1838)	7	4	0	9	0	0	1	0	0	0	0	0
落嘶千里藪(1841)	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
梅屋集(1865)	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
明六雑誌(1874～ 1875)	3	1	0	12	0	0	1	0	2	0	0	0
東洋学芸雑誌 (1881～1882)	1	4	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
国民之友(1887～ 1888)	26	26	0	25	0	0	3	0	2	0	0	0
太陽(1895)	79	36	0	50	0	0	2	10	13	1	1	1
太陽(1901)	129	31	0	138	0	0	5	8	21	0	0	0
太陽(1909)	76	43	0	270	0	0	34	22	55	2	1	0
太陽(1917)	78	44	0	251	0	0	14	27	37	0	0	2
太陽(1925)	93	95	0	268	0	0	12	48	95	0	0	1

## 2. 先行研究

<sup>29</sup> 大蔵虎寛本狂言は1792年書写であるが、蜂谷（1977）は「虎寛本においては、江戸時代初めごろにだいたい整えられた形式の中でさらに類型的・体系的に整理され、その間、丁寧語などを中心とするある種の表現に、幾分江戸時代中期以降の新しい語形・用法が取り入れられた」と述べている。この指摘から、大蔵虎寛本狂言は江戸前期から中期頃の状況を反映していると考えられる。本研究では近世期を近世前期と近世後期に区分しており、江戸前期から中期は、本研究でいう近世前期から近世後期初頭に相当する。

## 2-1 此島 (1966)

此島 (1966) では、「トカ」を「カ」の一部として記述している。まず、(2) (3) のように、引用の「ト」の下に「カ」の添う用法があり、(4) のように、「トカ」が一語化して、下の「言う」のような動詞なしに並立に用いられるようにもなったとしている。

- (2)<sup>30</sup>宇賀龍とか土蜘蛛とかいふものゝ押出し。 (浮世風呂・四下)  
(3) 霊よカ厲よカセヨトアルホドニ…… (蒙求抄・十)  
(4) 酵素を主体とする生化学的連鎖反応であるとすると、当然酵素の生成とか色々の形質との相関とかが考えられ…… (「現代語の助詞・助動詞」一一九ペ)

## 2-2 岩田 (2014)

岩田 (2014) は、上代から現代までの「トカ」の用例を調査し、その変遷過程を記述した。岩田によると、8世紀頃から、「トカ」は疑問（係り）として使用されていた（5）。その後、遅くとも11世紀までには伝聞の用法が成立した（6）。15世紀頃から助詞「カ」の影響をうけて、「トカ」にも選言用法が見られるようになる（7）。その後、18世紀後半から19世紀にかけて選言用法からの派生として例示用法が発生する（8）とした。

- (5)<sup>31</sup>海原の沖行く船を帰れとか領巾振らしけむ松浦佐用姫 (万葉 3. 252)  
(6) いとあやしき、梵字とかいふやうなる跡に侍めれど、 (源氏 3. 296)  
(7) 霊トカ厲トカセヨトアルホドニ (蒙求 10. 9 ウ)  
(8) 今日帰ると造作とか戸棚とかを買って仕舞ますヨ (春色梅児誉美 100)

以上のように、並列形式「トカ」の発生に関して、従来の研究は助詞「カ」との関係が注目されているが、「ト+カ」から「トカ」への一語化の具体的な過程についての詳しい考察はまだ見られない。

以下では、こうしたことを踏まえて、「トカ」の意味用法と後続形式の展開について考察する。そして、「トカ」が使われる文脈の特徴を分析する。

## 3. 「トカ」の意味用法の展開

### 3-1 中世後期

「トカ」に二つ（以上）の要素を並べる「A トカ B トカ」の形式が見られるようになる

<sup>30</sup> (2)～(4) の用例は此島 (1966) による。引用に際して例文番号を変更した。

<sup>31</sup> (5)～(8) の用例は岩田 (2014) による。引用に際して例文番号を変更した。

のは、中世後期であり、その初出例は（9）である。

（9）我死ナバ。ワルキ。ヲクリ名デ。アラウズ。靈ト謚スルカ。又厲ト謚ヲスルカ。  
セヨト云ソ。靈モ厲モ惡キ謚ソ。好イ謚ヲセイト。云ハイテ。惡キ謚ヲ。セヨト。  
イワレタカ。共デヨイトテ。共主ト子囊ガ。ハカラウテ。謚シタソ。コヽデ。大  
夫ハ君命テ。靈トカ。厲トカ。セヨト。アルホドニ。 (= (1))

（9）では、「靈ト謚スルカ。又厲ト謚ヲスルカ。セヨト云ソ」という文脈で「靈」と「厲」が並列され、謚を「靈」と「厲」のどちらかにするという意味を表している。後文脈に「大夫ハ君命テ。靈トカ。厲トカ。セヨト。」とあり、「靈」と「厲」を選択肢として提示している。「カ」の選言用法を引き継ぐものである。選言用法と考えられる。

### 3-2 近世前期

近世前期になると、（10）のように、「コソ」を付加した「AトカBトコソ」という形式が見られるようになる。

（10）洛陽にて浄土宗の寺へ、ある尼公の参られ、一人の弟子をよび出し、十念をうけたきよしひろうしてたび候へとありしかは、こころへたるとて方丈に行、下京にてなにといふ人のようにんの参りにてと申もあへぬに、長老はを出し、上臍とか女房とこそ申へけれ、によにんといふ事やあると大にしかられ、弟子の返答に、そなたハ我に阿弥陀經ををしへて、善男子善女人といへといふておみて、今ハ又さういはぬとハ一事両様なる事をなど、さん/＼にからかひておもてへ出ける時、尼公赤面し、せうしや、お機嫌のあしきをとする、下向せんやと申されたれハ、弟子いふ、いやくるしいうも候ハす、ちとにうはうことのいてりで御座あると。 (醒睡笑 2.21・1623)

（10）では、長老は女人に対して、「上臍」あるいは「女房」と申しあげるべきではあっても、女人と言う事があるだろうか（いや、ない）と述べている。ここには「上臍」「女房」という二つの要素が挙げられているが、両者の関係は次のように考えられる。

『日本国語大辞典』（第2版）には「上臍女房」という「身分の高い女官」の意味の語が掲載されている。用例は以下のようである。

（11）満佐須計装束抄〔1184〕三「上らう女ばうの色を聴（ゆ）るといふは、青色赤色の織物の唐衣、地摺の裳をきるなり」

（12）平家物語〔13C前〕六・廻文「上臍女房達あまた選ばれて参られけり。公卿殿

上人おほく供奉して、ひとへに女御参りの如くにてぞ有りける」

- (13) 太平記〔14C後〕一一・越中守護自害事「兵庫助貞持が女房は、此の四五日前に、京より迎へたりける上臘（ラウ）女房にてぞ有りける」

(12) の「上臘女房達」から分かるように、「上臘女房」で「身分の高い女官」を表す。

他方、(10)「身分の高い女官」の代表例として「上臘」と「女房」を提示している。

また、近世前期には、(14) (15) のような「AトカBナドトコソ」の形式も見られるようになる。

- (14) さて此かゆといふ文字を、りやうわきに弓をかいて、中にこめをかくにハしさ  
いこそ候ハメ、ふしんしごくに存候、そもノ＼かゆといふ物ハ、水の中へこめを  
いれ、しるくやわらかににたるをかゆといふなれハ、あるひハさんずいにこめと  
か、じきへんにゆなどゝこそかくべきものにて侍るなるに、

(一休関東咄 1.84・1672)

- (15) さればとよ、これにつきて又ふしんこそ候へ、只今のごとく笑といふ字を竹かふ  
りにいぬをかくこそ心ゑね、わらふといふ文字ならば、口へんにひろがるとか、  
目へんにしわむなどゝこそかくへき物にて侍るに、 (一休関東咄 1.84・1672)

(14) では、「粥」という文字を「りやうわきに弓をかいて、中にこめをかく」のではなく、水の中に米を入れて煮ることでお粥を作るのだから、「さんずいにこめ」「じきへん（食偏）にゆ」のような書き方にすべきと述べ、(15) では、「笑」という文字を「竹かふりにいぬをかく」のではなく、「口へんにひろがる」「目へんにしわむ」のような書き方にすべきと述べている。これらは、「粥」の作り方、「笑」の動作に基づいて、存在しない漢字を創作する笑話である。

「AトカBナドトコソ」は「ナド」の付加により、A、B以外のほかの要素が存在することが意味される。(14) (15) については、「さんずいにこめ」「じきへんにゆ」「口へんにひろがる」「目へんにしわむ」以外にも作ろうと思えば、新たに漢字を作ることができることである。

- (16) 去人、芹やきを喰て、何と、此せりやきハ、火にあぶるものにてハなきに、芹煮  
とか煮芹とかいふべきものなるに、芹やきといふ事ハ、不思儀なることじやとい  
ふた。かたゑなる人のいふやうハ、まだ芹ハ、鍋にて煮物じやさかいに、やくと  
いふ縁も有が、まつさら火のけもないに、月代といふ事さへ有といふた。

(宇喜藏主古今咄揃 5.7・1678)

- (17) 出家ハ仏くさく儒者ハ孔子くさし。去医者のかたに、ぶ調方なる小者をつかハれ

ける。本より田舎者にて物ごとかたことばかりいひける。去方より薬代を持て來りけるを、かのおとこ請取、たれさまからかねがまいりましたといふ。礼の口上をいひつけ使をかへし、跡にて小者をよび、そこなもの。医者の内におるからハ薬代とか銀子とかいふものじや。かねがまいりましたといふことが有ものか。己來ハたしなめといへるゝ。小者、かしこまりました。其後、夜ばなしの客ありけるが、もはやこよひハ何時じやととハれければ、かのおとこ、たゝ今初夜の銀子がなりましたといふた。

(初音草嶠大鑑 6. 167・1698)

- (18) 古来より此町には異名をつかぬわろハ一人もないに、徳右衛門とのハかりを異名つけずにハおかれますまい。なんと、五人組の焼味繪の太郎兵衛どの、松原の喜兵衛どの、千秋樂の五兵衛どの。こりやかりそめながら大事の事でござれば、ねがはれても異名つけずにハおかれますまい。コレ、九郎兵衛どの。徳右衛門とのハ此度辰巳角の屋敷をもとめられたほどに、我庵の徳右衛門とか、宇治の里の徳右衛門とかつけませふ。ミなどれ／＼も一子細づゝあつてつける異名でござる。

(咲顔福の門 7. 224・1732)

(16) は、火に当てて焼くことをしていないことから、「芹やき」という呼び方は相応しくない、「芹煮」「煮芹」のような呼び方が正しいということを述べている。この例では「芹やき」の代案として「芹煮」「煮芹」を提案している。

(17) は、医者のところでは「かね」という言葉を使うべきではない。医者の所で使うのに相応しい言葉として「薬代」「銀子」を使うべきであると述べている。この例では、「かね」の代案として「薬代」「銀子」を提案している。

(18) は、「徳右衛門」という人物の異名として、「此度辰巳角の屋敷をもとめられた」という理由から、「我庵の徳右衛門」「宇治の里の徳右衛門」を提案している。

近世前期（～後期初頭）<sup>32</sup>の「AトカBトカ」形式には、(19) (20) のような疑問の意味で使用されている用例も見られる。

- (19) 扱々むさとしたやつの。 伯父御は伊勢へ行ふとか、行まいとか。

(大藏虎寛本狂言・素袍落. 179・1792)

- (20) 是はいかな事。 伯父御は伊勢へ行ふとか、行まいとか。

(大藏虎寛本狂言・素袍落. 179・1792)

- (19) (20) は、伯父が一緒に伊勢参宮に立つかどうかということを主人が太郎冠者に

<sup>32</sup> ここでは、大藏虎寛本狂言の用例は、近世前期から近世後期初頭にかけての状況を反映しているとみなす。

聞く場面であり、「伯父は伊勢へ行くというか、行くまいというか」という意味であるので、選択疑問である。

### 3-3 近世後期

近世後期には、「A トカ何トカ」の形式が見られるようになる。この形式は、だいたいこういう内容の話を聞いたという意味の伝聞用法で用いられている。(21) (22) は、「A トカ何トカ」にそれぞれ「ふるなの弁」「いわれていたもん」が後続していることから、「けふは凪はよかつたがなぜか不猶で」と「あわたしもおいらん」が伝聞内容であることが分かる。

(21) ねつからはぜつ子も持て帰らねへようじやあ悪ひけれどももう取集て四五十もあらふからけふは凪はよかつたがなぜか不猶でとか何とかそりやあ又ふるなの弁で  
をれもとりなすから気遣のきんのじもねへはさ  
(深川新話 1779)

(22) やつぱり爰のうちの旦那さんがあつちに居なすつた時分勤めて居やしたが。其時  
きやあわたしもおいらんとか何とかいわれていたもんで有りましたが。それから  
云かはした人があつて。  
(明鳥後の正夢・五編巻之十五 1824)

(23) は、近世後期にも見られた用法である。「寛政」という年号は言いにくいので、代案として「十介」「一介」という言いやすい名を例として挙げている。

(23) 八とんや。年号か替つたか、しつたか。へイヽヤ。何とかわつた。寛政と。ヽナ  
ニ、くわんせい。ハテ云にくい名だ。十介とか一介とか附れハいゝに。てい主ハ  
テ、そんな年号か有物かへ。ヽヤレ、そふでない。むかし、文治といふと元禄と  
いふか有つたよ  
(笑の初り 12. 213・1792)

さらに、この時期の「A トカ B トカ」形式には、次のような用法が見られるようになる。

(24) 八介、火事ハいづくに見へる。八介アイ。こふとな、浅草の門跡と見へますとい  
へバ、旦那大キニはらを立れ、おのれ、大事の御しうしを、もんせきと、おふへ  
いにぬかしおる。此後急度、御門跡様とか御坊様とか、御の字を付ていゝおれと  
申付けバ、ハヤ八助、浅草様へ御見舞に行づハなるまいと、頓而とひぐち引かつ  
き、ハイ / \、御はいない  
(はつ鰐 11. 329・1781)

(24) の「御門跡様とか御坊様とか、御の字を付ていゝおれ」は、「御門跡様」や「御  
坊様」を例として挙げ、直後にそれらを「御の字を付て」と一般化している。

次の例も同じ用法である。

(25) わつちらも、おめさん方の前だが、出入引がありやア一はながけにとん出て、わけみちを聞た上で、ネエ、そりやアお身さまが心得違だとか、但おのしが利屈だとか、よしんば少らッつの無利をいつても、済すましを付て、手エ打てしまふといふもんでござへす  
(酌酌氣質・下. 233・1806)

この例は、「ネエ、そりやアお身さまが心得違だ」と「おのしが利屈だ」を例として挙げ、それらを「少らッつの無利」と一般化している。

このように、近世後期には、(25) のように、「A トカ B トカ + N」の形式で「トカ」の例示用法が成立していたと考えられる。

また、この時期には、(26) のような候補を表す「トカ」の用法も見られるようになる。

(26) ナニ、面白くもねへ。かゝさんもわつちも、こんなに留メばのしきせ羽織一枚づゝきて、ほんにおめへのやうな役者とかはくしやとかいふ御きようなおかたにつれそへば、寒くてならぬへ。それにマア、雪見処か、あんまりわるくしやれなさんな  
(百生瓢 15. 9・1813)

(26) では、「役者」とそれに音声が似ている「はくしや」を、その人の職業として想定される候補として並べている。

### 3-4 明治期以降

明治期以降、「トカ」には、(27) (28) のように、「A トカ B トカ + N」「A トカ B トカ + イウ N」といった形式 (A、B は N の例にあたる) の例示用法が多く見られるようになる。また、(29) (30) のように、N に当たる要素が見られない例示用法も多く見られる。

(27) 支那本土の人にて李とか劉とかいふ名門右族にして大豪傑出て満清を亡ぼし渙然大號を發し歐米の學術技藝を用ひしめば二京十八省大なりと雖ども廣しと雖ども火車汽船電信砲臺軍艦立どころに辨すべし  
『明六雑誌』「支那不可侮論」中村正直 1875)

(28) 日本では、醫師が一番早く洋書を研究したものであつたが、兵書とか化學とか種々の書物を購ひ度にも、醫師も學者も、自ら獨りの力では出來ぬ、  
『太陽』「追懷談」川村純義 1901)

(29) 肉體が飢えて來た場合には其糧としてはどうしても形を有つた米とか肉とか云ふものが必要だが、精神や靈魂になると、餘程趣が違ふ。

(『太陽』「小學讀本に現はれたる經濟事項(三)」河上肇 1917)

- (30) 然らば彼等は其得たる勞銀を溜めて貯金でもするかと云ふに、少數の者を除いては、決してそんな着實の考はなく、多くは飲食物とか衣類とかを求めて、右から左に其金を散じて了ふ。 (『太陽』「物價問題」高橋是清 1917)

(27) では、「名門右族」の例として「李」「劉」並べている。「李」と「劉」は例であるから、それ以外の「名門右族」の存在が考えられる。

(28) では、「種々の書物」の例として「兵書」と「化學」を並べている。「兵書」と「化學」以外の「書物」の存在が考えられる。

(29) では、「食べ物」の例として「米」と「肉」を挙げている。「米」と「肉」以外の「食べ物」の存在も考えられる。

(30) では、「日常生活が必要なもの」の例として「飲食物」と「衣類」を並べている。「飲食物」や「衣類」以外の「日常生活が必要なもの」の存在も考えられる。

なお、この時期には、(31)～(34)のような、同じ動詞の肯定形と否定形と並べる用法も見られるようになる。

(31) 政治熱の盛んな岡山産れで犬養木堂氏などにも知られ關係があつたとか無かつたとか云はれた程の女性であつたが、その後石川氏と關係のあつたことは知る人ぞ知る。 (『太陽』「文壇風聞記」水上渉 1925)

(32) 流石の山口も同僚も、その無作法に度膽を抜かれたと云ふよりは、寧ろ呆れて了ひ、「これなら、まだ旅館の女を相手にして飲んだ方がいい。」と早々引上げて、三たび太い息を吐いてゐる。「馬鹿に悄げて了つたもんだね。」と同僚が云ふと「旅の恥も斯う極端ではね」と答へたとか、答へぬとか。そこは不明瞭だが、雁鍋屋に當てられたのは事實ぢやさうだ。 (『太陽』「政界太平記」前座陳人 1925)

(33) —その頃百合子夫人に何か戀愛問題でも起つてはゐないか知らなぞとあの創作を読んで本氣に何かを搜してゐる人もあるやうだが、噂さによれば何か同性の愛とやらがあるとか無いとか。 (『太陽』「文壇風聞記」水上渉 1925)

(34) 日本銀行の利下げが發表前にもれたとかもれぬとかの噂を耳にするにつけても、鐘紡の武藤山治氏があの思ひ切つた増資と、減配案とを、發表するまで誰にも嗅ぎつけさせなかつたお手際は、實際鮮やかなものだと、今更に敬服されるから、その當時のことを一寸書いて見よう。

(『太陽』「よく祕密を守った 武藤山治氏」 1925)

これらは伝聞用法の一種であると考えられる。「トカ」の伝聞用法では情報が確実でないことが表されるが、これらの例のように、肯定形だけでなく、否定形を並べることで、

より不確実になり、噂にすぎないといったニュアンスになる。

### 3-5 「トカ」の意味用法の展開のまとめ

各時期における「トカ」の用法別の用例数を表2に示す。以上の考察から、「トカ」の用法の展開過程は次のようにまとめられる。

「トカ」の二つ（以上）の要素を挙げる用法は中世後期に出現する。発生初期（中世後期～近世前期）には、「A トカ B トカ」「A トカ B トコソ」の形式の選言用法、そして、「A トカ B トカ」の形式の疑問用法<sup>33</sup>が見られる。

近世前期においては、「A トカ B ナドトコソ」のような「ナド」を加えた形式が見られ、AとB以外の要素が存在することを表すようになる。

近世後期においては、「A トカ 何 トカ」の形式で伝聞用法が見られるようになり、不確実を意味するようになる。そして、「A トカ B トカ + N」の形式で、Nの例としてA、Bを並べる例示用法と、「A トカ B トカ」形式で、候補を挙げる用法がほぼ同時期に見られるようになる。この候補用法は、例示用法と同じく、AやB以外の要素の存在が考えられる。

明治期以降は、例示用法の用例が多く見られるようになり、定着した。そして、「A（肯定形） トカ（否定形） トカ」の形式で不確実性が強く噂にすぎないことを表す伝聞用法も見られるようになる。

---

<sup>33</sup> ここでは、大蔵虎寛本狂言の用例は、近世前期から近世後期初頭にかけての状況を反映しているとみなす。

表2 各資料における「トカ」の意味用法

用法 用例数 出典	選言	疑問	伝聞(～ トカ何 トカ)	伝聞(肯 定形 + 否定形)	候補	例示
万葉集(700年代)	0	0	0	0	0	0
源氏物語(1001～ 1010頃)	0	0	0	0	0	0
保元物語(中世前期)	0	0	0	0	0	0
平治物語(中世前期)	0	0	0	0	0	0
平家物語(中世前期)	0	0	0	0	0	0
史記抄(1477)	0	0	0	0	0	0
蒙求抄(中世後期)	1	0	0	0	0	0
醒睡笑(1623)	1	0	0	0	0	0
一休闐東咄(1672)	0	0	0	0	0	2
宇喜藏主古今咄揃 (1678)	1	0	0	0	0	0
初音草嘶大鑑(1698)	1	0	0	0	0	0
咲顔福の門(1732)	1	0	0	0	0	0
深川新話(1779)	0	0	1	0	0	0
はつ鰐(1781)	1	0	0	0	0	0
大蔵虎寛本狂言・素 抱落(1792)	0	3	0	0	0	0
笑の切り(1792)	1	0	0	0	0	0
阿蘭陀鏡(1798)	0	0	1	0	0	0
酩酊氣質(1806)	0	0	1	0	0	1
百生瓢(1813)	0	0	0	0	1	0
浮世床(1813～1814)	0	0	1	0	0	6
粹の曙(1820)	0	0	1	0	0	0
明鳥後の正夢(1821 ～1824)	0	0	1	0	0	1
花街鑑(1822)	0	0	0	0	0	2
春色梅児耆美 (1832～1833)	0	0	0	0	1	3
落嘶年中行事(1836)	0	0	0	0	0	1

花廻志満台(1838)	0	0	1	0	0	9
落嘶千里藪(1841)	0	0	0	0	0	1
梅屋集(1865)	0	0	0	0	0	1
明六雑誌(1874～1875)	0	0	1	0	0	14
東洋学芸雑誌(1881～1882)	0	0	0	0	0	1
国民之友(1887～1888)	0	0	3	0	0	27
太陽(1895)	0	0	2	0	0	73
太陽(1901)	0	0	5	6	0	161
太陽(1909)	0	0	34	0	0	347
太陽(1917)	0	0	14	1	0	314
太陽(1925)	0	0	12	9	0	408

#### 4. 「トカ」の後続形式の展開

前節では、「トカ」の意味用法の展開について考察した。ここでは、各時期における後続形式の特徴を観察していく。考察対象とする形式は、「A トカ B トカ」「A トカ B トコソ」「A トカ B ナドトコソ」「A トカ B ナド／ナンカ／ナンゾ」「A トカ B」である。そして、「トカ」の一語化の過程についても考察する。

##### 4-1 中世後期

中世後期の状況を示すものとして、次の例に注目する。

(35) 我死ナバ。ワルキ。ヲクリ名デ。アラウズ。靈ト謚スルカ。又厲ト謚ヲスルカ。  
 セヨト云ソ。靈モ厲モ惡キ謚ソ。好イ謚ヲセイト。云ハイテ。惡キ謚ヲ。セヨト。  
 イワレタカ。共デヨイトテ。共主ト子囊ガ。ハカラウテ。謚ンタソ。コヽデ。大  
 夫ハ君命テ。靈トカ。厲トカ。セヨト。アルホドニ。 (= (1))

この例の「トカ」の後続形式は動詞「スル」である。この例は、「謚ヲ～トスル」という連語中のト格名詞に選言用法の「カ」を付加したものと捉えられる。したがって、この例については一語化した「トカ」の例ではないと考えられる。

この時期の「A トカ B (トカ)」に後続する要素はすべて「言ウ」「スル」のような「～ト」をとることのできる動詞であり、また、「A トカ B トカ+N」のような形式も見られないことから、この時期は「トカ」の一語化はまだ生じていないと考えられる。

#### 4－2 近世前期

近世前期の状況を示すものとして、まず、後続形式がある場合を見る。

- (36) 洛陽にて浄土宗の寺へ、ある尼公の参られ、一人の弟子をよび出し、十念をうけたきよしひろうしてたび候へとありしかは、こころへたるとて方丈に行、下京にてなにといふ人のによにんの参りにてと申もあへぬに、長老はを出し、上臈とか女房とこそ申へけれ、によにんといふ事やあると大にしかられ、弟子の返答に、そなたハ我に阿弥陀経ををしへて、善男子善女人といへといふておゐて、今ハ又さういはぬとハ一事両様なる事をなど、さん／＼にからかひておもてへ出ける時、尼公赤面し、せうしや、お機嫌のあしきをとする、下向せんやと申されたれハ、弟子いふ、いやくるしうも候ハす、ちとにうはうことのいていりで御座あると。  
(= (10))
- (37) さても此かゆといふ文字を、りやうわきに弓をかいて、中にこめをかくにハしさいこそ候ハめ、ふしんしごくに存候、そも／＼かゆといふ物ハ、水の中へこめをいれ、しるくやわらかににたるをかゆといふなれハ、あるひハさんずいにこめとか、じきへんにゆなどゝこそかくべきものにて侍るなるに、  
(= (14))
- (38) さればとよ、これにつきて又ふしんこそ候へ、只今のごとく笑といふ字を竹かぶりにいぬをかくこそ心ゑね、わらふといふ文字ならば、口へんにひろがるとか、目へんにしわむなどゝこそかくべき物にて侍るに、  
(= (15))
- (39) 去人、芹やきを喰て、何と、此せりやきハ、火にあぶるものにてハなきに、芹煮とか煮芹とかいふべきものなるに、芹やきといふ事ハ、不思儀なることじやといふた。かたゑなる人のいふやうハ、まだ芹ハ、鍋にて煮物じやさかいに、やくといふ縁も有が、まつさら火のけもないに、月代といふ事さへ有といふた。  
(= (16))
- (40) 出家ハ仏くさく儒者ハ孔子くさし。去医者のかたに、ぶ調方なる小者をつかはれける。本より田舎者にて物ごとかたことばかりいひける。去方より薬代を持て来りけるを、かのおとこ請取、たれさまからかねがまいりましたといふ。礼の口上をいひつけ使をかへし、跡にて小者をよび、そこなもの。医者の内におけるからハ薬代とか銀子とかいふものじや。かねがまいりましたといふことが有ものか。己來ハたしなめといひるゝ。小者、かしこまりました。其後、夜ばなしの客ありけるが、もはやこよひハ何時じやととハれければ、かのおとこ、たゞ今初夜の銀子がなりましたといふた。  
(= (17))
- (41) 古来より此町には異名をつかぬわろハ一人もないに、徳右衛門とのハかりを異名つけずにハおかれますまい。なんと、五人組の焼味繪の太郎兵衛どの、松原の喜

兵衛どの、千秋楽の五兵衛どの。こりやかりそめながら大事の事でござれば、ね  
がはれても異名つけずにハおかれますまい。コレ、九郎兵衛どの。徳右衛門との  
ハ此度辰巳角の屋敷をもとめられたほどに、我庵の徳右衛門とか、宇治の里の徳  
右衛門とかつけませふ。ミなどれ／＼も一子細づゝあつてつける異名でござる。

(= (18))

(36) では「申ス」が、(37) (38) では「書ク」が、(39) (40) では「イウ」が、(41) では「ツケル」が後続している。そして、これらは、「～ト申ス」「～ト書ク」「～トイウ」「～トツケル」といった連語に「カ」を挿入したものと分析できる。

次に、近世前期（～後期初頭）<sup>34</sup>文末用法の例に注目する。

(42) 扱々むさとしたやつの。伯父御は伊勢へ行ふとか、行まいとか。 (= (19))

(43) 是はいかな事。伯父御は伊勢へ行ふとか、行まいとか。 (= (20))

(42) (43) は、伯父が一緒に伊勢参宮に立つかどうかということを主人が太郎冠者に聞く場面である。「A トカ B トカ」が文末に位置し、後続形式はない。「A というか B というか」の意味であり、引用の「ト」+疑問の「カ」と分析される。したがって、この例については、「トカ」は一語化していない。

以上のように、この時期の「トカ」については、後続形式がある場合もない場合も「～ト～」に「カ」を挿入したものと解釈でき、「トカ」の一語化は成立していないと考えられる。ところが、意味の点では、選択疑問の例を除き、すでに例示的になっていることが注目される。用例の多くは、文字の書き方や人や物の呼び方について提案する例であり、話し手や書き手が思いついた例を述べているのである。

#### 4-3 近世後期

近世後期は、前期の状況を引き継ぎつつも、一語化した例が見られるようになる。

まず、(44) は、「～トイフ」に「カ」を挿入したものと解釈でき、一語化の証拠にはならない。

(44) ナニ、面白くもねへ。かゝさんもわつちも、こんなに留メばのしきせ羽織一枚づゝ  
きて、ほんにおめへのやうな役者とかはくしやとかいふ御きようなおかたにつれ  
そへバ、寒くてならぬへ。それにマア、雪見処か、あんまりわるくしやれなさん  
な (= (26))

---

<sup>34</sup> ここでは、大蔵虎寛本狂言の用例は、近世前期から近世後期初頭にかけての状況を反映しているとみなす。

次の三例も、「イウ」や「(名ヲ) 付ケル」といった「～ト」をとる動詞が後続しており、「～ト～」に「カ」を挿入したものと解釈できる。

- (45) 八介、火事ハいづくに見へる。八介アイ。こふとな、浅草の門跡と見へますといへバ、且那大キニはらを立れ、おのれ、大事の御しうしを、もんせきと、おふへいにぬかしおる。此後急度、御門跡様とか御坊様とか、御の字を付ていゝおれと申付けば、ハヤ八助、浅草様へ御見舞に行ずハなるまいと、頓而とひぐち引かつき、ハイ / \、御はいない  
(= (24))
- (46) 八とんや。年号か替つたか、しつたか。ヘイヽヤ。何とかわつた。寛政と。ヘナニ、くわんせい。ハテ云にくい名だ。十介とか一介とか附れへいゝに。てい主ハテ、そんな年号か有物かへ。ヘヤレ、そふでない。むかし、文治といふと元禄といふか有つたよ  
(= (23))
- (47) そりやア二文も承知だがの。一体酒が悪いはな。斯云て可愛さうに酒に咎をなするンぢやアねへが、つい一斤きめると、野郎めエ、浮て来るもんだから、楷とならアス。ソレ翌る日は天窓が重てへとか、お頭痛が遊ばすとか云てぶん流すか。  
(浮世床・初編上. 254・1813～1814)

次の例も、「～ト (無理ヲ) イウ」に「カ」を挿入したものと解釈できるが、上に挙げた例とはやや異なる。

- (48) わつちらも、おめさん方の前だが、出入引がありやア一はながけにとん出て、わけみちを聞いた上で、ネエ、そりやアお身さまが心得違だとか、但おのしが利屈だとか、よしんば少らツつの無利をいつても、済すましを付て、手工打てしまふといふもんでござへす  
(= (25))

それは、並列された要素は、「無理」が後続してそれらを一般化することによって、「無理」の例になっているということである。

一方、次のような例になると、「トカ」は例示用法として完全に一語化している。

- (49) あのお滝さん。中通りの作良屋でね。ああ引何とか言ましたつけむむ何でも大そふ智識の和尚さまが。あのお談義とかお説法とかを為ますが。種々な面白い咄しを為ると言て。近所から皆が往ますよ。私も往たいと思ひますが。お前さんも左様して塞てばかりお出なさらずと。往て御覧なさいな。左様したらまたお気の晴

る事もございませう

(花廻志満台 1838)

この例の動詞「スル」は、「～ヲ」とり、「～ト」をとらない。よって、この例の「トカ」を「ト」+「カ」と解釈することはできない。

次の例でも、「トカ」は一語化している。

(50) 這へば立て。たてば歩行と丹情して。漸の事で人尺にし。それから嫁に遣るとか。

聟を取るとかして。やれうれしやは是から初孫の顔見るがたのしみと。我が年の寄る事は気もつかず。先から先をいそぐのは。子の可愛 / \にくつたくして居るからの事でごぜへやすぜ。 (明鳥後の正夢・初編三の巻 1821)

さらに注目すべきは、近世後期においては、(50) のように、「トカ」は一語化しただけでなく動詞句を並列することができるようになっていることである。引用の「ト」+「カ」であれば動詞句をとるのは当然であるが、「トカ」が動詞句を並列できるようになったことは、並列形式としての発展の結果である。

#### 4-4 明治期以降

明治期になると、「A トカ B トカ」形式がさらに拡張していく。まず、この時期には、

(51) ~ (53) のような、「A トカ B トカ + ト + イウ N」「A トカ B トカ + ト + 発話動詞」のような形式が見られるようになる。こうした例も、「トカ」自体に引用の性質はなくなっていて、完全に一語化されていることを示している。

(51) 児童の家庭教育にはそんなに食ふと死ぬとかそんなことをすると罰があたるとか親の言ふことを聞かぬと目がつぶれるとかと云ふ如き種類にて屢々彼等を欺くの必要あり (『太陽』「妄語戒即ち眞語律に就て」渡辺龍聖 1895)

(52) ところが大變義心があるとか、義侠であるとかといふて喜んで、『さういふわけなら侍には後來お勧めはせぬ、侍は實にこうあるべきだ、實に御尤もだ』と賞められた。 (『太陽』「青年時代の苦學（下）」芳川顕正 1901)

(53) 公徳の欠乏は我國民の一大欠點であるかも知れん、併ながら此公徳と云ふことも唯公徳が必要であるとか、或は公徳を養成せねばならぬとかと云ふばかりでは、是を養成することは出來ない。 (『太陽』「〔輿論一斑〕」1901)

さらに、この期には、(54) ~ (56) のように、後方の「トカ」が省略された例が見られるようになる。並列助詞として「ト」「ヤ」「カ」などと同じようになつたわけである。

(54) それ故急に考へても緩に考へても早く民選議院を起すヲを御勧め申すが眞の正直より出でし愛國とか忠義にて皇統人民合一保護の業と存じます

(『明六雑誌』「民選議院變則論（一）」阪谷素 1875)

(55) 夫から薪炭のやうな、油とか炭を備へて居つて其學校なり書院なり義學へ行くものはそこで稽古を致します、 (『太陽』「日清教育の比較」大鳥圭介 1895)

(56) 今日商法をするとか或は工業を起すには日本人は熟慮に乏しく何時でも都合の好い考ばかりして若し此手際でやつて間違つたる時にはどうだといふ誤つた時の用心は少いやうに考へます、 (『太陽』「日清教育の比較」大鳥圭介 1895)

ほぼ同じ時期に、前に見た「A トカ B トカ + ト + イウ N」についても、後方の「トカ」が省略されるようになる。(57) (58) のような「A トカ B + ト + イウ N」の用法は「A トカ B」が一まとまりで、それに助詞「ト」が後続する形式に見ることができる。

(57) さう云ふ譯で御座いまするから一軒に今支那の國政を改革するとか或は又新規に事を納れて其國を善くするといふ事は是から後は知れませぬが今日のところは六ヶ敷い、 (『太陽』「日清教育の比較」大鳥圭介 1895)

(58) で私の今言ふ歴史と云ふのは開化史のことである、並みのちよつとした宗教の歴史とか相撲の歴史とか歌舞伎の歴史と云ふ歴史は、是は特別な話しだすが今私の言ふのは學問になりさうな歴史の御話をして居るのですから、

(『太陽』「歴史は科學に非ず」田口卯吉 1895)

#### 4-5 「トカ」の後続形式の展開のまとめ

各時期における並列形式「トカ」の後続形式をまとめると表3のようになる。以上の考察から、「トカ」の後続形式の展開と一語化の過程は次のようにまとめられる。

「トカ」の後続形式の展開については、中世後期・近世前期において、「申ス」「スル」「書ク」のような動詞が後続する、引用構文の「～ト～」に「カ」を挿入したものから始まり、近世後期には「A トカ B トカ + N (A、B の一般化)」の形式や「A トカ B トカ + 格助詞」「A トカ B トカ + スル (A、B は動詞句)」の形式が出現し、明治期以降には、後方の「トカ」が省略された「A トカ B + 格助詞」などが現れた。一語化が成立したのは、近世後期である。なお、例示用法は、一語化が成立する前の近世前期に出現していたと考えられる。つまり、引用的な性質を維持しつつ意味的に例示に使用されていた時期があり、その後、引用から完全に脱却し、純粹な例示形式に発展した。

表3 各資料における並列形式「トカ」の後続形式<sup>35</sup>

<sup>35</sup> 用例数を表す際、括弧を付けていない数字は「A トカ B トカ」と「A トカ B」と「A トカ B ナド／ナンカ／ナンゾ」全体の用例数を示す。〔〕は「A トカ B」形式の用例数を示す。<>は「A トカ B ナド／ナンカ／ナンゾ」形式の用例数を示す。()の中は後続のX、Nが集合体の特徴を示す用例数を表す。

<sup>36</sup> 非発話・思考動詞は「スル」「書ク」「付ケル」のような発話・思考動詞でない、「～トスル」「～ト書ク」「～ト付ケル」の用法として使われる動詞を指す。

37 Xは文相当の内容を表す。

<sup>38</sup> Nは名詞相当の内容を表す。

<sup>39</sup> この「スル」は並列形式「トカ」の上接部が動詞（句）の用法で、「スル」が実質的な意味を持っていない、「AトカBトカスル」全体が一つの漢語サ変動詞として使われる用法を指す。

<sup>40</sup> この1例は「AトカBトヨソ」形式の用法である。

<sup>41</sup> この2例は「AトカBナドヨソ」形式の用法である。

初音草嶢大鑑 (1698)	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
咲顔福の門(1732)	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
深川新話(1779)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
はつ蟹(1781)	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
大藏虎寛本狂言・ 素袍落(1792)	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
笑の切り(1792)	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
阿蘭陀鏡(1798)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
酩酊氣質(1806)	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
百生瓢(1813)	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
浮世床(1813～ 1814)	3	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0
粹の曙(1820)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
明鳥後の正夢 (1821～1824)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
花街鑑(1822)	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
春色梅児誉美 (1832～1833)	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	1	0	0	0
落嘶年中行事 (1836)	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
花廻志満台(1838)	5	0	1	1(1 )	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0
落嘶千里藪(1841)	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
梅屋集(1865)	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
明六雑誌(1874～ 1875)	2	0	0	4 (2)	0	0	1	2	0	1	0	0	0	3	0	0	1	0	1
東洋学芸雑誌 (1881～1882)	0	0	0	1 (1)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
国民之友(1887～ 1888)	3	0	0	4	0	5	0	8 (2)	0	0	0	0	0	5	1	1	3	7 [1]	4 [1]
太陽(1895)	11	3	3	13 [1]	9 (3)	0	1	10 <1>	2	0	5 [5]	1	1	3 [1]	2 <2>	7 [4]	4 <1>	0 <1>	0

太陽(1901)	24	0	5	37	6	3	6	23	2	0	5	1	0	2	40	3	2	2
			[1]	(7)	(2)	(2)	(6)	(18)			[4]	[1]		(1)	[14]		[1]	
								)			<1>						<7>	
太陽(1909)	47	1	7	83	31	1	3	34	7	3	13	8	0	1	97	4	2	5
			[2]	<4>	<2>	(1)	(3)	(23)	[6]	[2]	[12]	[7]		<1>	[25]		[1]	
					(3)			)			<1>	<1>	(1)			<12>		
太陽(1917)	39	0	5	91	14	3	1	29	6	1	13	2	0	3	100	1	1	5
	<1>			<1>	<1>	[1]	(1)	<1>	<5>	[1]	[9]	[2]		(2)	[24]		<1>	
				(7)	(2)			(17)			<1>					<16>		
								)										
太陽(1925)	24	0	8	76	23	1	4	45	6	4	30	20	0	3	154	6	2	2
	<1>		[2]	<4>	(5)		(4)	(37)	[1]	[4]	[21]	[15]		[1]	[50]	<1>	[1]	
				(3)				)	<5>		<4>	<2>		<1>	]<3			
											(2)	(2)		(2)	0>			

## 5. 中世・近世における「トカ」の使用文脈

用例を観察していく気づいたことであるが、中世から近世における「トカ」の例には、似たような文脈で使用されることが多い。

例えば、次の例は、大夫が謚を「靈」または「厲」という悪い意味のものにしろと命じたという話であるが、中世・近世前期の「トカ」の例には、このように、何かを選んだり、変更したり、決定したりする際の例を挙げる文脈で使用されたものが多い。

(59) 我死ナバ。ワルキ。ヲクリ名デ。アラウズ。靈ト謚スルカ。又厲ト謚ヲスルカ。  
セヨト云ソ。靈モ厲モ惡キ謚ソ。好イ謚ヲセイト。云ハイテ。惡キ謚ヲ。セヨト。  
イワレタカ。共デヨイトテ。共主ト子囊ガ。ハカラウテ。謚ンタソ。コヽデ。大  
夫ハ君命テ。靈トカ。厲トカ。セヨト。アルホドニ。 (= (1))

次の例でも、長老が尼公に対して、「上臘」「女房」という身分の高い女性の呼び方をすべきであると主張している。

(60) 洛陽にて浄土宗の寺へ、ある尼公の参られ、一人の弟子をよび出し、十念をうけたきよしひろうしてたび候へとありしかは、こころへたるとて方丈に行、下京にてなにといふ人のようにんの参りにてと申もあへぬに、長老はを出し、上臍とか女房とこそ申へけれ、によにんといふ事やあると大にしかられ、弟子の返答に、そなたハ我に阿弥陀経をしへて、善男子善女人といへといふておみて、今ハ又さういはぬとハ一事両様なる事をなど、さん／＼にからかひておもてへ出ける時、尼公赤面し、せうしや、お機嫌のあしきをとする、下向せんやと申されたれハ、弟子いふ、いやくるしうも候ハす、ちとにうはうことのいていりで御座あると。  
(= (10))

次の例も同様である。「粥」や「笑」という漢字は本来はどうあるべきかという主張をしている。

- (61) さても此かゆといふ文字を、りやうわきに弓をかいて、中にこめをかくにハしさいこそ候ハめ、ふしんしごくに存候、そも／＼かゆといふ物ハ、水の中へこめをいれ、しるくやわらかににたるをかゆといふなれハ、あるひハさんずいにこめとか、じきへんにゆなどゝこそかくべきものにて侍るなるに、  
(= (14))
- (62) さればとよ、これにつきて又ふしんこそ候へ、只今のごとく笑といふ字を竹かふりにいぬをかくこそ心ゑね、わらふといふ文字ならば、口へんにひろがるとか、目へんにしわむなどゝこそかくへき物にて侍るに、  
(= (15))

次の例も同様である。「芹やき」という言い方の代わりに「芹煮」「煮芹」という言い方をすべきだとか、「かね」ではなく「薬代」「銀子」と言うべきだということが主張されている。

- (63) 去人、芹やきを喰て、何と、此せりやきハ、火にあぶるものにてハなきに、芹煮とか煮芹とかいふべきものなるに、芹やきといふ事ハ、不思儀なることじやといふた。かたゑなる人のいふやうハ、まだ芹ハ、鍋にて煮物じやさかいに、やくといふ縁も有が、まつさら火のけもないに、月代といふ事さへ有といふた。  
(= (16))

- (64) 出家ハ仏くさく儒者ハ孔子くさし。去医者のかたに、ぶ調方なる小者をつかひれける。本より田舎者にて物ごとかたことばかりいひける。去方より薬代を持て來りけるを、かのおとこ請取、たれさまからかねがまいりましたといふ。礼の口上をいひつけ使をかへし、跡にて小者をよび、そこなもの。医者の内におるからハ薬代とか銀子とかいふものじや。かねがまいりましたといふことが有ものか。己

来ハたしなめといハるゝ。小者、かしこまりました。其後、夜ばなしの客ありけるが、もはやこよひハ何時じやととハれければ、かのおとこ、たゞ今初夜の銀子がなりましたといふた。 (= (17))

近世前期の次のような例も同様である。

(65) 古来より此町には異名をつかぬわろハ一人もないに、徳右衛門とのハかりを異名つけずにハおかれますまい。なんと、五人組の焼味繪の太郎兵衛どの、松原の喜兵衛どの、千秋樂の五兵衛どの。こりやかりそめながら大事の事でござれば、ねがはれても異名つけずにハおかれますまい。コレ、九郎兵衛どの。徳右衛門とのハ此度辰巳角の屋敷をもとめられたほどに、我庵の徳右衛門とか、宇治の里の徳右衛門とかつけませふ。ミなどれ／＼も一子細づゝあつてつける異名でござる。

(= (18))

(65) では、「我庵の徳右衛門」「宇治の里の徳右衛門」のような異名をつけることを勧めている。

近世後期にも同様の例が見られる。

(66) 八介、火事ハいづくに見へる。八介アイ。こふとな、浅草の門跡と見へますといへば、且那大キニはらを立れ、おのれ、大事の御しうしを、もんせきと、おふへいにぬかしおる。此後急度、御門跡様とか御坊様とか、御の字を付ていゝおれと申付れば、ハヤ八助、浅草様へ御見舞に行ずハなるまいと、頓而とひぐち引かつき、ハイ／＼、御はいない (= (24))

(67) 八とんや。年号か替つか、しつたか。ヘイヽヤ。何とかわつた。寛政と。ヘナニ、くわんせい。ハテ云にくい名だ。十介とか一介とか附れハいゝに。てい主ハテ、そんな年号か有物かへ。ヘヤレ、そふでない。むかし、文治といふと元禄といふか有つたよ (= (23))

(66) は、「浅草の門跡」は不適切であり、「御門跡様」とか「御坊様」とか「御」の字を付けて呼べと言っており、(67) は、「寛政」より言いやすい「十介」「一介」を用いべきであると提案している。

以上のように、中世から近世にかけての「トカ」の使用される文脈には、明らかに特徴的な傾向があるのだが、これは文法の問題ではなく、語用論的な現象であろう。そもそも人は何のために例を挙げるかと言うと、基本的には、他人に何かを説明したり、他人を説得したりするためである。こうした事実は、「トカ」が例示用法は早くから獲得しつつあ

ったということを示唆しているのではないか。

## 6. おわりに

本章では、並列形式「トカ」の意味用法・後続形式・一語化の変遷過程について考察した。最後に考察結果を表にまとめておく。

表4 「トカ」の意味用法・後続形式・一語化の変遷過程

	意味用法	後続形式	一語化
中世後期	選言	スル（「～ト～」句）	一語化していない
近世前期	選言、疑問、例示	申ス、書ク、ツケル (「～ト～」句)、 $\phi$ <sup>42</sup>	一語化していない
近世後期	例示、伝聞、候補	ツケル（「～ト～」句）、 N（A、Bの一般化） スル（A、Bは動詞 句）、言ウ、助詞	一語化が始まる
明治期以降	例示、伝聞、候補	発話・思考動詞（言ウ、 申スなど）、非発話・ 思考動詞（付ケルな ど）、N（A、Bの一 般化）、スル（A、B は動詞句）、助詞、コ ピュラ、「ト+発話・ 思考動詞（言ウ、申ス など）」	一語化が完了

<sup>42</sup> 文末用法を示す。

## 第二章 並列形式「トヤラ（ン）」の史的展開

### 1. はじめに

「トヤラ（ン）」については、二つ（以上）の要素を挙げる並列用法は中世後期において初めて見られるようになる。具体例としては、（1）が挙げられる。本章は、並列形式「トヤラ（ン）」の史的展開過程を考察する。

具体的には、「トヤラ（ン）」の意味用法の展開、後続形式の展開について考察する。

（1）熊野へ参詣する人あり。岩のかけぢを、たごしとやらん又あをだとやらんいふにのせて、かゝれたるが、谷のふかき事、千ひろもあらんを見やり、さても一足ふミそこなふたらハ、五軀ハ微塵にならん物よといひけり。　（醒睡笑 2. 168・1623）

用例の収集は「トヤラ（ン）」と「ヤラ（ン）」の両方について行った。用例の収集には、中納言『日本語歴史コーパス』、中華若木詩抄、嘶本大系などを利用した<sup>43</sup>。以下に一覧を示す。各時期における「トヤラ（ン）」「ヤラ（ン）」の用例数は表1に示す。

上代…万葉集

中古…源氏物語

中世…平家物語、中華若木詩抄（『新日本古典文学大系』岩波書店）

近世…[嘶本大系] 醒睡笑、昨日は今日の物語（整版九行本）、一休関東咄、鹿の子餅、馬鹿大林、笑の友、福山椒、花競二巻嘶、身振嘶寿賀多八景、落嘶屠蘇喜言（『嘶本大系』東京堂出版）

[近松淨瑠璃] 五十年忌歌念佛、淀鯉出世滝徳、夕霧阿波鳴渡、長町女腹切、山崎与次兵衛寿の門松、心中天の網島

[洒落本] 陽台遺編・粧閣秘言、南闇雑話、深川新話、総籬、北華通情、南遊記、箱まくら

<sup>43</sup> 並列形式「トヤラ（ン）」の発生初期においての用法の展開をより精確に記述するため、近世期の用例は30年ごとにいくつかの用例を採取できるように、中納言『日本語歴史コーパス』のほか、嘶本大系、新編日本古典文学全集などから用例を採取した。『日本語歴史コーパス』においての検索条件は①短単位検索で、キーを「品詞が助詞 AND 語彙素読みがヤラ」（「ヤラ」が一つの助詞としての形式）と②短単位検索で、キーを「品詞が動詞 AND 語彙素読みがアル AND 活用形の大分類が未然形」、前方共起1を「品詞が助詞 AND 語彙素読みがヤ」、後方共起1を「品詞が助動詞 AND 語彙素読みがム」（助詞「ヤ」+動詞「アル」の未然形+助動詞「ム」からできた「ヤラン・ヤラム」）両方設定した。

[人情本] 明鳥後の正夢、仮名文章娘節用、春色梅児与美、春色辰巳園、花廻志満  
台

現代…太陽

表1 各資料における「ヤラ (ン)」「トヤラ (ン)」の用例数

形式	A ヤ ラ ヘ ン )	A ト ヤ ラ ( ン )	代 名 詞 + ヤ ラ ( ン )	代 名 詞 + ト ヤ ラ ( ン )	ド ウ ヤ ラ コ ウ ヤ ラ	ド ウ ヤ ラ 彼 ヤ ラ	何 ヤ ラ 彼 ヤ ラ	A ヤ ラ 何 ヤ ラ 彼 ヤ ラ	A ヤ ラ B ヤ ラ 何 ヤ ラ 彼 ヤ ラ	A ヤ ラ ヘ ン )	A ヤ ラ B ヤ ラ B ヤ ラ ヘ ン )	A ト ヤ ラ ヘ ン )	A ヤ ラ ヘ ン )	A ト ヤ ラ ヘ ン )	A ヤ ラ ヘ ン )	A ト ヤ ラ ヘ ン )	A ヤ ラ B ナ ド / ナ ゾ
用例数																	
出典																	
万葉集(700 年代)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
源氏物語 (1001～1010 頃)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
平家物語(中 世前期)	84	0	2	2	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0
中華若木詩抄 (中世後期)	29	2	3	1	0	0	0	0	0	5	0	0	0	0	0	0	0
醒睡笑(1623)	20	2	5	3	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0
昨日は今日の 物語(整版九 行本)(1636)	5	0	4	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0
一休闐東咄 (1672)	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0
五十年忌歌念 仏 (1707)	3	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0

淀鯉出世滝徳 (1708)	4	2	0	1	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0
夕霧阿波鳴渡 (1712)	3	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0
長町女腹切 (1712)	6	1	1	0	0	0	0	0	0	6	0	0	1	0	0
山崎与次兵衛 寿の門松 (1718)	0	1	1	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0
心中天の網島 (1720)	3	2	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0
阳台遺編・姫 閣秘言(1758)	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0
鹿の子餅 (1772)	4	1	2	0	1	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0
南閨雑話 (1773)	2	9	5	0	0	1	0	0	0	0	0	3	0	0	0
深川新話 (1779)	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	2	0
総籬(1787)	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0
北華通情 (1794)	12	6	2	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0
南遊記(1800)	7	4	1	1	2	0	0	0	0	2	0	1	0	0	0
馬鹿大林 (1801)	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0
笑の友(1801)	4	0	1	1	3	2	0	0	0	0	0	1	0	0	0
福山椒(1803)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0
花競二巻嘶 (1814)	1	2	0	0	0	0	0	0	0	2	0	1	0	0	0
身振嘶寿賀多 八景 (1814)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0
明鳥後の正夢 (1821～1824)	46	62	7	0	7	0	0	0	0	3	0	3	0	0	0
箱まくら	2	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0

(1822)															
落嘶屠蘇喜言 (1824)	2	2	2	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0
仮名文章娘節 用 (1831～1834)	8	10	3	2	1	0	0	0	0	2	0	1	0	0	0
春色梅児与美 (1832～1833)	10	10	4	2	4	1	0	0	0	2	0	1	0	0	0
春色辰巳園 (1833～1835)	8	10	0	0	0	2	1	0	0	2	0	1	0	0	0
花廻志満台 (1836～1838)	10	22	1	1	2	0	1	0	0	0	0	2	0	0	0
太陽(1895)	27	38	42	9	6	1	0	0	0	7	0	2	0	0	0
太陽(1901)	25	16	27	1	7	1	0	1	1	21	1	0	1	0	1
太陽(1909)	17	22	16	1	16	1	0	0	0	15	4	0	1	1	0
太陽(1917)	19	1	25	1	15	1	0	0	0	24	7	0	0	0	1
太陽(1925)	30	13	23	1	40	2	0	0	0	21	0	1	0	0	2

## 2. 先行研究

### 2-1、此島(1966)

此島(1966)では、「ヤラ」の意味用法には二つのタイプがあると指摘している。江戸時代以前には(2)のように、疑問・不定の意を含んで使われていたとし<sup>44</sup>、江戸時代に入ってから、(2)～(5)のように、並列したどれをも肯定するという新しい用法が見られると述べている。

- (2)<sup>45</sup>焼クルホドニ烟ヤラ浪ヤラ天ニ漲ルソ (中華若木詩抄・上)
- (3) お姫様は、おどろきやらうれしきやらはずかしさで、夢心地でした。  
(「現代語の助詞・助動詞」227～)
- (4) 出来た所が、塩梅が悪いやら、手際が悪いやらで、ヤンヤという程にも行かねへ  
(浮世床)
- (5) どうやら斯うやら間を合わせました (好色伝授・中)

<sup>44</sup>『室町時代言語の研究』(風間書房 1970)では、(2)の意味を「烟か浪か定かならぬものが、天に漲る」と解釈している。

<sup>45</sup> (2)～(5)の用例は此島(1966)による。引用に際して例文番号を変更した。

岩田・衣畑（2011）では、（6）のような直接疑問、（7）のような不定、（8）のような間接疑問、（9）のような例示の各用法の関係について考察している。

- （6）<sup>46</sup>何を思ってそんなことを言ったのやら。
- （7）何やらへんな音がする。
- （8）何があるのやら、わからない。
- （9）太郎やら次郎やらが来た。

岩田・衣畑（2011）は、「ヤラ」の例示用法の成立時期については、「ヤラ」の意味的特徴を i)、ii)、iii) に分類し、i) が安定的に使われるようになる時期を確認して、「ヤラ」の例示用法の成立時期が 18 世紀前半であることを明らかにした。

i) 話者が並列される事態の両方（不定詞の場合は片方）が真であることを直接知っている例

- （10）そばで泣くやらわめくやら。行き来も止まるばかりなり。（卯月紅葉, 2. 100）

ii) 話者が並列される事態の両方（不定詞の場合は片方）が真であることを直接知らない例

- （11）お前のお頼みなされたやら、どうしたやら存ぜねども。（大経師昔歴, 2. 545）

iii) 文脈からは i とも ii とも判断できない例

- （12）身は濡鼠、腹立つやら、をかしいやら。挨拶もせず、（女殺油地獄, 1. 220）

岩田・衣畑（2011）は、「ヤラ」の例示用法は 18 世紀前半には文末（13）、注釈（14）で多用されており、これは直接疑問が文末・注釈で使われるという特徴と一致することから、直接疑問から派生したと結論づけた。

- （13）田舎の客が身請けのこと、…理屈をつめてねだれごと。腹が立つやら、憎いやら。とはいひながら、これは先。忠兵衛様は後手といひ、（冥土の飛脚, 1. 124）

- （14）八助は寒いやら寝むたいやら、小ひだるいやら、むしやくしや腹を立、（軽口片頬笑, 8. 322）

直接疑問、不定、間接疑問の意味的な特徴について、岩田・衣畑（2011）では、次のよ

---

<sup>46</sup> （6）～（14）の用例は岩田・衣畑（2011）による。引用に際して例文番号を変更した。

うに説明している。

直接疑問・不定・間接疑問はいずれも命題が両方成り立つことを含意しない。「田中が来たやら山田が来たやら」が直接疑問として発話された場合に「田中がきた」「山田がきた」という命題のどちらについても、成立するかどうかわかつていることを意味する。「誰やらが来た」という不定は、田中か山田かその他の人物かのいずれかの人物がきたということであり、全ての命題が成立することを意味しない。ヤラによる間接疑問は、時代を通じて、述語が「知らない」「わからない」など「未決」を意味するものに限られるという特徴がある。 (岩田・衣畑 2011: 65)

以上のように、先行研究では、並列形式「ヤラ（ン）」の展開を中心に考察されているが、「トヤラ（ン）」の展開についての考察はまだ見られないようである。そこで、この章では、先行研究を参考にしながら、「トヤラ（ン）」の意味用法と後続形式に関する展開について考察する。

### 3. 「トヤラ（ン）」の意味用法の展開

#### 3-1 近世前期前半

「トヤラ（ン）」に二つ（以上）の要素を挙げる並列用法が見られるようになるのは、近世前期である。そのときの形式は「A トヤラン B トヤラン」である。

- (15) 熊野へ参詣する人あり。岩のかけぢを、たごしとやらん又あをだとやらんいふにのせて、かゝれたるが、谷のふかき事、千ひろもあらんを見やり、さても一足ふミそこなふたらハ、五駄ハ微塵にならん物よといひけり。 (= (1))
- (16) しろかねやの太郎兵へ申けるハ、むかしより、かミそりに、さきなしとやらん、さやなしとやらん申、其上わたくし、さいくには、中仕りつけぬ物にて候ほどに、たゞおぼしめし御とまり候へ、と申せハ、ひんそう、ずんど思ひきりて、
- (昨日は今日の物語(整版九行本) 1. 155・1636)

(15) の「たごし」は、「竹や木などを用いて編んだ粗末な釣り輿（ごし）。進物の釣り台のように、日覆いがない」というもので、「あをだ」は「輿（こし）」の一種。前後ふたりで、手で腰のあたりまで持ち上げて運ぶもの」というものである<sup>47</sup>。たごしとあをだは外形が似ていることが分かる。当該部分の意味は、「たごしと言うか、あをだと言うか、どう呼ぶか分からない」ということであるから、これは候補を挙げる用法である。

<sup>47</sup> たごし、あをだ、か（昇）くの説明は『日本国語大辞典』（第2版）による。

(16) は、「剃刀に～」ということわざの言い方がはつきりと分からぬという意味である。ここでは「さきなし」と「さやなし」の二つの言い方を候補として挙げている。

以上の二例については、「イフ」「申」という「～ト」をとることのできる動詞が後続しており、引用の性質を維持している。他方、次の例も、古い屏風にある絵に描かれているのが「馬」であるか「うし」であるか分からぬという意味であり、これも候補を挙げる用法であるが、この例は引用とは無関係である。

(17) 又古きべうぶに何ともかたちのしれぬ絵ありけり。ていしゆにとハせ給へバ、ふるくなり候てわけ見へ不申、私親が申候つるハ、馬とやらんうしとやらんにて御ざ候よし申けれハ、うしならハつの有へし、つのなけれハ馬なるべきぞとのたまふ。

(一休閑東咄 1. 74 • 1672)

このように近世前期前半には、引用由来の用法とそうでないものが共存している。

### 3-2 近世前期後半

近世前期の後半にも、候補を挙げる用法の例が見られる。

(18) これ、夕霧殿とやら、夕飯殿とやら 節季師走、こなたのやうに暇ではない  
(夕霧阿波鳴渡 1712)

(18) は、相手が「夕霧殿」であるか「夕飯殿」であるか名前がはつきりと分からぬという意味であり、やはり候補を挙げる用法である。

一方、この時期には、次のような、それとは違う用法も見られる。

(19) これ見たか おのれが請状にある親めが印判妹とやら、嫁とやらが文とも合せて吟味した 署名ほども違ひなし。 (五十年忌歌念佛 1707)

(19) は、「妹とか嫁とかの手紙の筆跡とも照合して念入りに調べたが」<sup>48</sup>という意味である。これは、手紙の筆跡を調べた人の例をとして、「妹」と「嫁」を挙げている。すなわち、例示用法である。

### 3-3 近世後期

近世後期にも、候補を挙げる用法は引き続き見られる。

---

<sup>48</sup> 新編日本古典文学全集（小学館）現代語の訳による。

(20) いいにくひ事が、裏やぐらとやら、巨燐櫓とやら、こんながたびしする所へ來た事あねへが。つみにこんなに安くされた事あねへぜへ (深川信話 1779)

(20) は、「裏やぐら(うらやぐら)と言うのか、巨燐櫓(こたつやぐら)と言うのか、分からぬといふ意味である。引用とは関係ない。

この時期に新たに見られるようになるのは、(21) (22) のような「A トヤラ何トヤラ」という形式である。一種の伝聞表現である。

(21) おなしみせの小花が本町せんだの木ばしのごふくやのむすめ。それに豊与のやをが江戸のきんじよのかな川とやらなにとやらいふたけれどもわすれました。おなしみせに名歌といふちいさいおやまがある。 (北華通情 1794)

(22) 東 こりやあちつとおせへよふ  
安 そんならお歌さん一寸とおあゐとやら何とやら  
歌 こりやあもふお見立て迷惑いたしあす (深川新話 1779)

(21) は、「言ウ」を後続させており、「かな川」という呼び方が正しいかどうかはつきり分からぬといふ意味である。

(22) の「おあゐ(おあい)」は「酒席で、杯のやりとりの際、二人の間に入って第三者が代わりに杯を受けて座興を添えること」<sup>49</sup>である。この例は、「おあゐ」という言い方が正しいかどうかよく分からぬといふ意味である。

(23) 長「むむそれもたしか噂に聞た荒川淵右え門とやら。菅家の一軸紛失もきやつ等が仕業とおもふたゆゑ  
波「あの船頭の市どのが全六さんとお侍が。唄きあふた嘶のうち。菅家とやら一軸  
とやら。たしかに聞たとわたしへ嘶 (明鳥後の正夢・四編卷之十一 1824)

(23) は、聞いた話の内容の例として「菅家」「一軸」を挙げている。すなわち、例示用法である。

### 3-3 明治期以降

明治期には、「トヤラ (ン)」の用例数が全体的に減少していく。明治後期になると、候補を挙げる用法の例は見られなくなり、(24) (25) のような例示用法の例のみになるが、用例は少ない。

<sup>49</sup> 『日本国語大辞典』(第2版)による。

(24) 十歳ばかりの頃までは相應に悪戯もつよく、女にしてはと亡き母親に眉根を寄せさせて、ほころびの小言も十分に聞きし物なり、今の母は父親が上役なりし人の隠し妻とやらお妾とやら、種々曰くのつきし難物のよしなれども、持ねばならぬ義理ありて引うけしにや、それとも父が好みて申受しか、その邊たしかならねど勢力おさおさ女房天下と申やうな景色なれば、まま子たる身のおぬひが此瀬に立ちて泣くは道理なり、  
(『太陽』「行く雲」樋口一葉 1895)

(24) は、「今の母」は父親の上役だった人の「隠し妻」だとか「お妾」だとか言われていて、「種々曰くのつきし難物」であったという意味であり、「今の母」がどのような点で「難物」と見られていたかの例を挙げる例示用法であると考えられる。

(25) 此頃、財界多事にして爲替問題とやら金輸出の解禁とやらの聲かまびすしく、さすが經濟に無智なる身も、何か常識の種位仕入れずばと、一日郊外に老人を訪ねて、半日の説法承はらんと申入れたり。(『太陽』「財界抜裏物語」白雨楼 1925)

(25) も、どういう問題について「聲かまびすしく」などの例として「爲替問題」や「金輸出の解禁」を挙げており、例示用法である。

### 3-4 「トヤラ (ン)」の意味用法の展開のまとめ

各時期における並列形式「トヤラ (ン)」の意味用法別の用例数を表2に示す。ここまでの考察結果は次のようにまとめられる。

「A トヤラ (ン) B トヤラ (ン)」の形式の並列用法は、近世前期前半から見られるが、この時期はまだ引用由来の用法が残存しており、引用から離れた例と共存していた。また、意味的には候補を挙げる用法が中心であった。

近世前期後半になると、引用から離れ、候補を挙げる用法が中心となる。また、例示用法がごくわずかに見えはじめる。

近世後期も、候補を挙げる用法が中心であるが、「A トヤラ何トヤラ」という新しい形式が登場する。例示用法も見られるが、まだ少ない。

明治期には、「トヤラ (ン)」自体が衰退し、明治後期以降は候補を挙げる用法の例はほぼなくなる。例示用法の例は見られるが、少數である。

表2 各資料における「トヤラ（ン）」の意味用法

意味用法 用例数	候補	伝聞 <sup>50</sup>	例示
出典			
万葉集(700年代)	0	0	0
源氏物語(1001~1010頃)	0	0	0
平家物語(中世前期)	0	0	0
中華若木詩抄(中世後期)	0	0	0
醒睡笑(1623)	1	0	0
昨日は今日の物語(整版九行本)(1636)	1	0	0
一休闐東咄(1672)	1	0	0
五十年忌歌念佛(1707)	0	0	1
淀鯉出世滝徳(1708)	0	0	0
夕霧阿波鳴渡(1712)	1	0	0
長町女腹切(1712)	0	0	0
山崎与次兵衛寿の門松(1718)	1	0	0
心中天の網島(1720)	1	0	0
阳台遺編・姫閣秘言(1758)	1	0	0
鹿の子餅(1772)	2	0	0
南闇雑話(1773)	3	0	0
深川新話(1779)	1	2	0
総籬(1787)	1	0	0
北華通情(1794)	0	1	0
南遊記(1800)	1	0	0
馬鹿大林(1801)	1	0	0
笑の友(1801)	1	0	0
福山椒(1803)	1	0	0
花競二巻漸(1814)	1	0	0
身振漸寿賀多八景(1814)	1	0	0
明鳥後の正夢(1821~1824)	2	0	1
箱まくら(1822)	1	0	0
落漸屠蘇喜言(1824)	0	1	0

<sup>50</sup> 「～トヤラ(ン)何トヤラ(ン)」形式

仮名文章娘節用(1831～1834)	1	0	0
春色梅児与美(1832～1833)	1	0	0
春色辰巳園(1833～1835)	1	0	0
花廻志満台(1836～1838)	2	0	0
太陽(1895)	1	0	1
太陽(1901)	0	0	0
太陽(1909)	0	1	0
太陽(1917)	0	0	0
太陽(1925)	0	0	1

#### 4. 「トヤラ (ン)」の後続形式の展開

この節では、各時期における「トヤラ (ン)」の後続形式の展開について考察する。考察対象は、「A トヤラ (ン) B トヤラ (ン)」形式である。

##### 4-1 近世前期前半

近世前期前半には、「イフ」や「申ス」が後続する例が見られる。これらは、引用句「～ト～」に「ヤラン」が挿入したものと考えられる。

- (26) 熊野へ参詣する人あり。岩のかけぢを、たごしとやらん又あをだとやらんいふに  
のせて、かゝれたるが、谷のふかき事、千ひろもあらんを見やり、さても一足ふ  
ミそこなふたらハ、五躰ハ微塵にならん物よといひけり。 (= (1))
- (27) しろかねやの太郎兵へ申けるハ、むかしより、かミそりに、さきなしとやらん、  
さやなしとやらん申、其上わたくし、さいくには、中々仕りつけぬ物にて候ほど  
に、たゞおぼしめし御とまり候へ、と申せハ、ひんそう、ずんどう思ひきりて、  
(= (16))

次は、コピュラが続く例であり、「馬とやらんうしとやらん」は名詞句にあたる。

- (28) 又古きべうぶに何ともかたちのしれぬ絵ありけり。ていしゆにとハせ給へバ、ふ  
るくなり候てわけ見へ不申、私親が申候つるハ、馬とやらんうしとやらんにて御  
ざ候よし申けれハ、うしならハつの有へし、つのなけれハ馬なるべきぞとのたま  
ふ。 (= (17))

##### 4-2 近世前期後半～近世後期

近世前期後半には、以下のように、様々な助詞（格助詞や係助詞）が後続する例が見られる。

- (29) これ見たか。おのれが請状にある親めが印判。妹とやら、嫁とやらが文とも合せて吟味した。畠栗ほども違ひなし。 (= (18))
- (30) その高橋とやら、高尾とやらはそなたのやうなうつそりでも銀さへ使へば髪も切る、爪も放そ (山崎与次兵衛寿の門松 1718)
- (31) 内からたんと客の吟味にあはんしてどこへもむさとは送らぬのいや太兵衛様に請け出され在所とやら、伊丹とやらへ行かんすはずとも聞き及ぶ (心中天の網島 1720)
- (32) ををそれは住吉の不躾茶屋とやら小町茶屋とやらの事じやないかいなあ (南遊記 1800)

「A トヤラ B トヤラ + N」の形式で、候補を挙げた後に一般化する名詞句が後続するパターンも見られる。

- (33) いいにくひ事たが、裏やぐらとやら、巨燁櫓とやら、こんながたびしする所へ來た事あねへが。つみにこんなに安くされた事あねへぜへ (= (20))

なお、近世後期から「A トヤラ 何 トヤラ」という形式が見られるようになるが、これについては第5節で詳しく述べる。

#### 4-3 明治期以降

この時期は、「トヤラ」の用例はごくわずかになるが、例を挙げた後に一般化する名詞句が後続する例と格助詞が後続する例が見られた。後者（35）も、「聲」で一般化していると見ることができる。

- (34) 十歳ばかりの頃までは相應に悪戯もつよく、女にしてはと亡き母親に眉根を寄せさせて、ほころびの小言も十分に聞きし物なり、今の母は父親が上役なりし人の隠し妻とやらお妾とやら、種々曰くのつきし難物のよしなれども、持ねばならぬ義理ありて引うけしにや、それとも父が好みて申受しか、その邊たしかならねど勢力おさおさ女房天下と申やうな景色なれば、まま子たる身のおぬひが此瀬に立ちて泣くは道理なり、 (『太陽』「行く雲」樋口一葉 1895)
- (35) 此頃、財界多事にして爲替問題とやら金輸出の解禁とやらの聲かまびすしく、さすが經濟に無智なる身も、何か常識の種位仕入ればと、一日郊外に老人を訪ね

て、半日の説法承はらんと申入れたり。(『太陽』「財界抜裏物語」白雨樓 1925)

#### 4-4 「トヤラ (ン)」の後続形式の展開のまとめ

各時期における並列形式「トヤラ (ン)」の後続形式別の用例数を表3に示し、「トヤラ (ン)」の後続形式の展開過程についての考察結果を以下にまとめる。

近世前期前半には、発話動詞が後続する例が見られるが、これらは引用句「～ト～」+「イフ」「申ス」に「ヤラン」が挿入されたと考えられる。このほか、コピュラ（「ニテ御座候」）が後続した例が見られる。

近世前期後半からは、助詞が後続する例や例を挙げて名詞で一般化する例が見られるようになり、その傾向は明治期以降も続くが、使用自体が大きく減少していく。

表3 各資料における並列形式「トヤラ（ン）」の後続形式

用例数 出典	後続形式	発話・ 思考 動詞	ト + 発話 ・思 考	イ ウ N	N	助詞	コ ピ ュラ	文末	スル
万葉集(700年代)	0	0	0	0	0	0	0	0	0
源氏物語(1001～ 1010頃)	0	0	0	0	0	0	0	0	0
平家物語(中世前期)	0	0	0	0	0	0	0	0	0
中華若木詩抄(中世 後期)	0	0	0	0	0	0	0	0	0
醒睡笑(1623)	1	0	0	0	0	0	0	0	0
昨日は今日の物語 (整版九行本)(1636)	1	0	0	0	0	0	0	0	0
一休関東咄(1672)	0	0	0	0	0	1	0	0	0
淀鯉出世滝徳(1708)	0	0	0	0	0	0	0	0	0
夕霧阿波鳴渡(1712)	0	0	0	0	0	0	1	0	0
長町女腹切(1712)	0	0	0	0	0	0	0	0	0
山崎与次兵衛寿の門 松(1718)	0	0	0	0	1	0	0	0	0
心中天の網島(1720)	0	0	0	0	1	0	0	0	0
阳台遺編・粧閣秘言 (1758)	0	0	0	0	1	0	0	0	0
鹿の子餅(1772)	0	0	0	0	1	0	1	0	0
南閨雑話(1773)	0	0	0	0	2	1	0	0	0
深川新話(1779)	0	0	0	1	0	0	0	0	0
総籬(1787)	0	0	0	0	0	1	0	0	0
北華通情(1794)	0	0	0	0	0	0	0	0	0
南遊記(1800)	0	0	0	0	1	0	0	0	0
馬鹿大林(1801)	0	0	0	0	1	0	0	0	0
笑の友(1801)	0	0	0	0	0	0	1	0	0
福山椒(1803)	0	1	0	0	0	0	0	0	0
花競二巻嘶(1814)	0	0	0	0	1	0	0	0	0
身振嘶寿賀多八景 (1814)	0	0	0	0	1	0	0	0	0

明鳥後の正夢 (1821～1824)	1	0	0	0	1	0	0	1
箱まくら(1822)	0	0	0	0	1	0	0	0
落嘶屠蘇喜言(1824)	0	0	0	0	0	0	0	0
仮名文章娘節用 (1831～1834)	1	0	0	0	0	0	0	0
春色梅児与美 (1832～1833)	0	0	1	0	0	0	0	0
春色辰巳園(1833～ 1835)	0	0	1	0	0	0	0	0
花廻志満台(1836～ 1838)	0	0	0	0	2	0	0	0
太陽(1895)	0	0	0	2	0	0	0	0
太陽(1901)	0	0	0	0	0	0	0	0
太陽(1909)	0	0	0	0	0	0	0	0
太陽(1917)	0	0	0	0	0	0	0	0
太陽(1925)	0	0	0	0	1	0	0	0

## 5. 「Aトヤラ何トヤラ」形式について

「トヤラ（ン）」については、「Aトヤラ何トヤラ」形式が「Aトカ何トカ」と同じく近世後期から見られるようになる。これは「話者自身が直接はつきりとは知らないが、聞いたことがある、見たことがあるといった不確定的な意味」<sup>51</sup>の伝聞表現である。

(36) 東 こりやあちつとおせへよふ

安 そんならお歌さん一寸とおあゐとやら何とやら

歌 こりやあもふお見立て迷惑いたしみす (= (22))

(37) おなしみせの小花が本町せんだの木ばしのごふくやのむすめ。それに豊与のやを  
が江戸のきんじよのかな川とやらなにとやらいふたけれどもわすれました。おな  
しみせに名歌といふちいさいおやまがある。 (= (21))

(36) (37) のような「Aトヤラ何トヤラ」形式は、3-3で述べたように、Aについてはつきりと分からないという不確実の意味を表している。不確実を表す「Aトヤラ（ン）Bトヤラ（ン）」の後半を不定語に置き換えたものにあたる。

<sup>51</sup> 岩田（2014）における伝聞用法の定義による。

(38) のような「A トカ何トカ」形式の伝聞用法もこの時期から見られるようになる。

(38) ねつからはぜつ子も持て帰らねへようじやあ悪ひけれどももう取集て四五十もあらふからけふは風はよかつたがなぜか不猶でとか何とかそりやあ又ふるなの弁でをれもとりなすから氣遣のきんのじもねへはさ (深川新話 1779)

しかし、第一章で述べたように、この時期においては「A トカ B トカ」形式には「はつきりと分からないものの候補を挙げる」用法はまだ見られない。「A トカ B トカ」形式に(39)のような候補を挙げる用法も見られるようになったのは、「A トヤラ何トヤラ」「A トカ何トカ」のはつきりと分からないものを表す用法の出現より後のことである(第1章3-3)。

(39) ナニ、面白くもねへ。かゝさんもわつちも、こんなに留メばのしきせ羽織一枚づゝきて、ほんにおめへのやうな役者とかはくしやとかいふ御きようなおかたにつれそへば、寒くてならぬへ。それにマア、雪見処か、あんまりわるくしやれなさんな (百生瓢 15.9・1813)

用法の発生順序から推定すると、「A トヤラ (ン) B トヤラ (ン)」のはつきりと分からないものの候補を挙げる用法から「A トヤラ何トヤラ」が派生し、それが「A トカ何トカ」を通して「A トカ B トカ」にも候補を挙げる用法が生じた可能性がある。

## 6. おわりに

本章では、並列形式「トヤラ (ン)」の意味用法・後続形式の変遷過程について考察した。最後に考察結果を表にまとめておく。

表4 「トヤラ (ン)」の意味用法・後続形式

	意味用法	後続形式
近世前期前半	候補	言ウ、申ス、コピュラ
近世前期後半	候補、例示	助詞
近世後期	候補、伝聞、例示	助詞、言ウ、N (A、B の一般化)、コピュラ
明治期以降	候補、伝聞、例示	助詞、N (A、B の一般化)

### 第三章 並列形式「トヤラ（ン）」と「ヤラ（ン）」の関係について

#### 1. はじめに

第二章では、並列形式「トヤラ（ン）」の展開を考察した。「トヤラ（ン）」は近世前期から見られるようになり、主に、（1）のような、はつきりと分からぬものの候補を表す用法で使用されていた。「トヤラ（ン）」には後年、例示用法も成立するが、候補を表す用法を中心に使われていたと考えられる。

（1）熊野へ参詣する人あり。岩のかけぢを、たごしとやらん又あをだとやらんいふにのせて、かゝれたるが、谷のふかき事、千ひろもあらんを見やり、さても一足ふミそこなふたらハ、五軀ハ微塵にならん物よといひけり。　（醒睡笑 2. 168・1623）

並列形式「トヤラ（ン）」に例示用法が発生するのは近世前期であるが、それとほぼ同じ時期に「ヤラ（ン）」にも例示用法が発生している（岩田・衣畠（2011）によれば、18世紀前半とされている）。

並列形式「トヤラ（ン）」と「ヤラ（ン）」は類義形式の関係にあり、「トヤラ（ン）」は明治期以降衰退していくものの、近世においては共存していたことになる。そこで、両者の関係が問題になる。本章は、近世までの「トヤラ（ン）」と「ヤラ（ン）」がどのような関係にあったかを考察する。

用例の収集にあたっては、第二章と同じく上代から近世まで資料を使用した。以下に一覧を示す。

上代…万葉集

中古…源氏物語

中世…平家物語、中華若木詩抄（『新日本古典文学大系』岩波書店）

近世…[嘶本大系] 醒睡笑、昨日は今日の物語（整版九行本）、一休関東咄、鹿の子餅、馬鹿大林、笑の友、福山椒、花競二巻嘶、身振嘶寿賀多八景、落嘶屠蘇喜言（『嘶本大系』東京堂出版）

[近松淨瑠璃] 五十年忌歌念佛、淀鯉出世滝徳、夕霧阿波鳴渡、長町女腹切、山崎与次兵衛寿の門松、心中天の網島

[洒落本] 陽台遺編・粧閣秘言、南閨雜話、深川新話、総籬、北華通情、南遊記、

箱まくら

[人情本] 明鳥後の正夢、仮名文章娘節用、春色梅児与美、春色辰巳園、花廻志満台

以上の資料から各時期における「トヤラ（ン）」「ヤラ（ン）」の用例数を形式別にまとめると表1になる<sup>52</sup>。

---

<sup>52</sup> 「ドウヤラコウヤラ」「何ヤラ彼ヤラ」といった、形式が固定化している慣用的な用法は除いた。

表1 各資料における「ヤラ (ン)」「トヤラ (ン)」の用例数

形式	A ヤ ラ (ン) B ヤラ (ン)	A トヤラ (ン) B ト ャ ラ (ン)	A ヤ ラ (ン) 何 ヤラ (ン)	A トヤラ (ン) 何 ト ャ ラ (ン)
用例数				
出典				
万葉集(700年代)	0	0	0	0
源氏物語(1001~1010頃)	0	0	0	0
平家物語(中世前期)	2	0	0	0
中華若木詩抄(中世後期)	5	0	0	0
醒睡笑(1623)	1	1	0	0
昨日は今日の物語(整版九行本)(1636)	1	1	0	0
一休闐東咄(1672)	0	1	0	0
五十年忌歌念佛(1707)	0	1	0	0
淀鯉出世滝徳(1708)	3	0	0	0
夕霧阿波鳴渡(1712)	0	1	0	0
長町女腹切(1712)	6	0	1	0
山崎与次兵衛寿の門松(1718)	1	1	0	0
心中天の網島(1720)	1	1	0	0
阳台遺編・姫閣秘言(1758)	0	1	0	0
鹿の子餅(1772)	0	2	0	0
南闇雑話(1773)	0	3	0	0
深川新話(1779)	0	1	0	2
総籬(1787)	0	1	0	0
北華通情(1794)	0	0	0	1
南遊記(1800)	2	1	0	0
馬鹿大林(1801)	0	1	0	0
笑の友(1801)	0	1	0	0
福山椒(1803)	0	1	0	0
花競二巻漸(1814)	2	1	0	0
身振漸寿賀多八景(1814)	0	1	0	0
明鳥後の正夢(1821~1824)	3	3	0	0
箱まくら(1822)	0	1	0	0
落漸屠蘇喜言(1824)	0	0	0	1
仮名文章娘節用(1831~1834)	2	1	0	0

春色梅児与美(1832～1833)	2	1	0	0
春色辰巳園(1833～1835)	2	1	0	0
花廻志満台(1836～1838)	0	2	0	0

なお、「ヤラ」の先行研究は序論で取り上げたので、ここでは割愛し、参照が必要な場合に引用することにする。

## 2. 各時期における並列形式「ヤラ（ン）」と「トヤラ（ン）」展開の関係

表1から分かるように、「～ヤラ（ン）～ヤラ（ン）」形式の用例は中世前期から見られる。他方、「～トヤラ（ン）～トヤラ（ン）」形式の用例は近世前期から見られる。ここでは、中世前期におけるそれぞれの意味用法を確認する。

### 2-1 中世前期

中世前期には、「～ヤラ（ン）～ヤラ（ン）」には（2）（3）のような疑問用法が見られる。

- （2）下萬は四五百千までこそ物の數をば知つて候へども、それよりうへは知らぬ候。  
おほいやらうすくないやらうをば知り候はず。 (平家物語・富士川・中世前期)
- （3）東国北国の源氏共、蜂のごとくに起りあひ、ただ今都へせめのばらんとするに、  
かやうに浪のたつやらん風の吹くやらんも知らぬ体にて、花やかなりし事共、な  
かなかいふかひなうぞみえたりける。 (平家物語・横田河原合戦・中世前期)

（2）（3）は、それぞれ、「～ヤラウ～ヤラウ」「～ヤラン～ヤラン」に「知り候はず」「知らぬ」が後続しているので、これらは間接疑問文<sup>53</sup>である。

### 2-2 中世後期

「～ヤラ（ン）～ヤラ（ン）」の間接疑問用法は、中世後期にも引き続き見られる。

- （4）細雨ナレバ、目ニモ見エズ、降ルヤラン、降ラヌヤラン、難見分。  
(中華若木詩抄. 32・中世後期)
- （5）山人ハ、早キヤラ遅キヤラ分別モナキ也。 (中華若木詩抄. 91・中世後期)
- （6）雲隙ヨリソツト見ヘタホドニ、盈夕月ヤラ虧ケタ月ヤラ、イマダ見分ヌゾ。

<sup>53</sup> 「ヤラ」による間接疑問文について、岩田・衣畑（2011）では「時代を通じて、述語が「知らない」「わからない」など「未決」を意味するものに限られるという特徴がある」と述べている。

(中華若木詩抄. 151・中世後期)

(7) 人ガ許スベキヤラン、許スマジキヤランハ知ラネドモ、吾ト許シテ聖人ノ徒ト称  
ジテモ恥ヅカシカラスト思フ也。 (中華若木詩抄. 275・中世後期)

(4)～(7)では、「～ヤラ(ン)～ヤラ(ン)」に「難見分」「分別モナキ」「見分ヌ」「知ラネ」が後続しており、間接疑問文であることが分かる。

そして、中世後期には、(8)のような、はっきりと分からぬものの候補を挙げる用法も見られるようになる。

(8) 船ハ柴ヲ積タレバ、足ガ軽キコト箭ヲ射ルガ如ニ、味方ノ船ヨリ敵ノ曹操ガ兵船  
ヘ吹付タレバ、百千ノ船ドモニ火ガ付イテ焼クルホドニ、烟ヤラ浪ヤラ天ニ漲ル  
ゾ。 (中華若木詩抄. 9・中世後期)

(8)は、船に火が付いて、煙が空へ上がる場面を表現している。「天ニ漲ル」のが「煙」であるか「浪」であるかはっきりと分からぬものである<sup>54</sup>。

## 2-3 近世前期前半

近世前期前半にも、(9)のような疑問用法が見られる。

(9) なゆやらじゆしんやらしらぬが、世ハねつするか (醒睡笑 2. 59・1623)

(9)は、「～ヤラ(ン)～ヤラ(ン)」に「しらぬ」が後続しており、この例も間接疑問文である。

そして、この期に、「～トヤラ(ン)～トヤラ(ン)」の方にも、(10)(11)のような、はっきりと分からぬものの候補を挙げる用法が見られるようになる。

(10) しろかねやの太郎兵へ申けるハ、むかしより、かミそりに、さきなしとやらん、  
さやなしとやらん申、其上わたくし、さいくには、中々仕りつけぬ物にて候ほど  
に、たゞおぼしめし御とまり候へ、と申せハ、ひんそう、ずんど思ひきりて、  
(昨日は今日の物語(整版九行本) 1. 155・1636)

(11) 又古きべうぶに何ともかたちのしれぬ絵ありけり。ていしゆにとハせ給へバ、ふ  
るくなり候てわけ見へ不申、私親が申候つるハ、馬とやらんうしとやらんにて御  
ざ候よし申けれハ、うしならハつの有へし、つのなけれハ馬なるべきぞとのたま

<sup>54</sup> 『室町時代言語の研究』(風間書房 1970) では、(8)の意味を「煙か浪か定かならぬものが、天に漲る」と解釈している。

ふ。

(一休関東咄 1.74・1672)

(10) は、「剃刀に～」ということわざの文句がはつきりと分からぬといふ意味である。(11) は、古い屏風にある絵が馬の絵であるか牛の絵であるか分からぬといふ意味である。いずれも、はつきりと分からぬものの候補を挙げる用法である。

## 2-4 近世前期後半

近世前期後半には、「～ヤラ（ン）～ヤラ（ン）」には、疑問用法と例示用法が見られる。他方、「～トヤラ（ン）～トヤラ（ン）」には、はつきりと分からぬものの候補を挙げる用法と例示用法が見られる。

### 2-4-1 「～ヤラ（ン）～ヤラ（ン）」の意味用法

#### 2-4-1-1 「～ヤラ（ン）～ヤラ（ン）」の疑問用法

まず、近世前期後半の「～ヤラ（ン）～ヤラ（ン）」の疑問用法の例を取り上げる。

(12) 徳兵衛はただ一人、九平次は五人連れ あたりの茶屋より棒づくめ、蓮池まで追ひ出し誰が踏むやら、たたくやら、さらに分ちはなかりけり

(曾根崎心中 1703)

(13) 乗り遅れたる淀堤淀の川水行く末はいかなる罪におほ坂の道がどこやら、何里やら 身は初雁よ

(長町女腹切 1712)

(12) は、「あたりの茶屋からは、てんでに棒を持って徳兵衛たちをおし囲い、蓮池まで追い出し、だれが踏むやら、たたくやら、全く区別はつかなかつた。」<sup>55</sup>といふ意味であり、間接疑問の例である。

(13) は、「大阪への道がどこやら、何里あるのやらわからぬ身は、初雁と同じことよ」<sup>56</sup>といふ意味であるが、「分からぬ」という意味の動詞ではなく、直接疑問の例になる。

#### 2-4-1-2 「～ヤラ（ン）～ヤラ（ン）」の例示用法

次に、この時期の「～ヤラ（ン）～ヤラ（ン）」の例示用法の例を取り上げる。

(14) むざんやな、源五兵衛、京も東も足止らず恋に心の不敵なく、また古郷に立ち帰り見つけられたらそれまでと、おまんに命すて杵の浮名さらしの、その日過ぎ、奉公人やら、手間取やら出入仕事の事介と名を変へ見つ、見らるるを取りえにて、

<sup>55</sup> 新編日本古典文学全集（小学館）の現代語訳による。

<sup>56</sup> 新編日本古典文学全集（小学館）の現代語訳による。

語る夜なきぞ、せうことなき

(薩摩歌 1704)

(15) 裏の高堀飛び損なひ、堀へ落ちて死ぬる場をおらん比丘尼は命の親、結ぶの神真  
実奇特な介抱故、鰐の口を逃れ出でやう / \ と福山の舟に乗り、九里の渡しも千  
里のごとくとけしないやら、怖いやら、気がくたびれてとろ / \ と舟梁に手枕し  
て、寝るとも思はぬその間にまざ / \ しい夢を見ました (薩摩歌 1704)

(16) オオ踏まいでおかうか。重ねてかやうな慮外をせば下々に打ち殺さする、用心せ  
よ駕籠持て来いと、うち乗るも腹立ちまぎれ、訳もなく後ろ向くやら、前向くや  
ら、縦に乗るやら横堀を急げ / \ と走らせし、若気のほどぞ笑止なる

(淀鯉出世滝徳 1708)

(17) 幼少の時、藤田小平次と申した 狂言役者へ、奉公やら養子やらに参つて女形を  
いたしたを、親且那のお蔭でお家へ参り、手代並になされしがさすが育ちが恥づ  
かしい、算用、算勘存せねば何を奉公、御恩を送らうやうはない

(淀鯉出世滝徳 1708)

(18) 乗合の窮屈さ、とろ / \ と寝よとすりや後ろからせせるやら、前からは毛の生え  
た大きな足を突き出すやら歯ぎりするやら、寝言やらをかしいことの数々は山崎  
から連れもあり上がってお山を一息に嵯峨へ下りたりや、 (長町女腹切 1712)

(14) は、「奉公人やら手間賃取やらして、通い奉公人の事介と名をかえ」<sup>57</sup>という意味  
である。この例は、「A ヤラ B ヤラ + N」の形式で、「奉公人」<sup>58</sup>と「手間賃取」<sup>59</sup>を例とし  
て挙げ、「出入仕事」と一般化する例示用法である。

(15) は、「もどかしいやらこわいやら、気がくたびれて、とろとろとなって、舟の横  
木に手枕していると」<sup>60</sup>という意味である。この例は、「A ヤラ B ヤラ + X」の形式で、「と  
けしない」と「怖い」を理由として挙げ、「気がくたびれてとろ / \ 」と結果を述べるも  
のであり、これも広義の例示用法と考えられる。

(16) は、「訳もなく、後ろを向くやら、前を向くやら、縦に乗るやら、横に乗るやら  
して、横堀を、「急げ、急げ」と走らせていった」<sup>61</sup>という意味である。この例は、「後ろ  
向く」「前向く」「縦に乗る」を例として挙げ、「走らせし」と一般化する例示用法である。

(17) は、「奉公」と「養子」を例として挙げ、「狂言役者のところで女形をしていた時  
の身分」と一般化する例示用法である。

(18) は、「乗合の窮屈さで、とろとろと寝ようとすると、うしろからつつくやら、前

<sup>57</sup> 新編日本古典文学全集（小学館）の現代語訳による。

<sup>58</sup> 奉公する人。武家、商家などに召し使われている人。江戸時代には、譜代、年季、出替（でがわり）の別があった。雇人。召使。ほうこにん。（『日本国語大辞典』（第2版）による）

<sup>59</sup> 手間賃で一時的に雇われること。手間賃をとって働くこと。また、その人。（『日本国語大辞典』（第2版）による）

<sup>60</sup> 新編日本古典文学全集（小学館）の現代語訳による。

<sup>61</sup> 新編日本古典文学全集（小学館）の現代語訳による。

からは毛の生えた大きな足を突き出すやら、歯ぎしりするやら、寝言やら、おかしいことは色々山ほど、山崎から道連れもあり、山に登って、お山を一気に嵯峨へ下りると」<sup>62</sup>という意味である。「後ろからせせる」「前からは毛の生えた大きな足を突き出す」「歯ぎりする」「寝言」を例として挙げ、「をかしいこと」と一般化する例示用法である。

#### 2-4-2 「～トヤラ (ン) ～トヤラ (ン)」の意味用法

##### 2-4-2-1 候補を挙げる用法

近世前期後半における「～トヤラ (ン) ～トヤラ (ン)」の意味用法として、まず候補を挙げる用法を取り上げる。

(19) これ、夕霧殿とやら、夕飯殿とやら. 節季師走、こなたのやうに暇ではない  
(夕霧阿波鳴渡 1712)

(20) その高橋とやら、高尾とやらはそなたのやうなうつそりでも銀さへ使へば髪も切  
る、爪も放そ  
(山崎与次兵衛寿の門松 1718)

はつきりと分からぬものの候補として、(19) では「夕霧殿」と「夕飯殿」を、(20) では「高橋」と「高尾」を挙げている。

##### 2-4-2-2 「～トヤラ (ン) ～トヤラ (ン)」の例示用法

この時期の「～トヤラ (ン) ～トヤラ (ン)」の例示用法には次のような例がある。

(21) これ見たか おのれが請状にある親めが印判妹とやら、嫁とやらが文とも合せて  
吟味した 署名ほども違ひなし。  
(五十年忌歌念佛 1707)

(21) は、「妹とか嫁とかの手紙の筆跡とも照合して念入りに調べたが」<sup>63</sup>という意味である。「妹」と「嫁」を手紙の筆跡を照合した家族の例として挙げる例示用法である。

#### 2-5 近世後期

近世後期における「～ヤラ (ン) ～ヤラ (ン)」「～トヤラ (ン) ～トヤラ (ン)」の用法は前代とほとんど変わらない。「～ヤラ (ン) ～ヤラ (ン)」には疑問用法と例示用法が見られ、「～トヤラ (ン) ～トヤラ (ン)」には候補を挙げる用法と例示用法が見られる。

##### 2-5-1 「～ヤラ (ン) ～ヤラ (ン)」の意味用法

<sup>62</sup> 新編日本古典文学全集（小学館）の現代語訳による。

<sup>63</sup> 新編日本古典文学全集（小学館）の現代語訳による。

## 2-5-1-1 疑問用法

まず、「～ヤラ（ン）～ヤラ（ン）」の疑問用法から取り上げる。

(22) 力とおもへどかひなきつとめ。ままで居るやらどふしたやらと。案じるのみと身の素生を。かたるをきいて金五郎は驚くことひとかたならず。

(仮名文章娘節用 1831)

(22) は、「案じる」が後続し、その内容を表す引用句の中に疑問用法の「～ヤラ～ヤラ」が現れた例である。

## 2-5-1-2 例示用法

次に、「～ヤラ（ン）～ヤラ（ン）」の例示用法の例を取り上げる。

(23) ぶつやらふむやらあらけなくひどうのてうちやく半兵衛は身のあやまりに手ざしもならずことに大せい手あしをおさへ身うごきならぬ此ばのなんぎ。やう／＼かた手を合すまね (春色梅児与美・四編巻の十二 1833)

(23) は、「ぶつ」と「ふむ」を例として挙げ、「ひどうのてうちやく（非道の打擲）」と一般化する例示用法である。

## 2-5-2 「～トヤラ（ン）～トヤラ（ン）」の意味用法

### 2-5-2-1 候補を挙げる用法

続いて、「～トヤラ（ン）～トヤラ（ン）」の候補を挙げる用法の例を見る。

(24) 成程以中や祇童と付合で桔梗屋へいたが井筒とやら井げたとやらはしらぬ。

(阳台遺編・嬌閣秘言 1758)

(24) は、はつきりと分からぬ、人物の名前の候補として「井筒」と「井げた」を挙げる例である。

### 2-5-2-2 例示用法

次は、「～トヤラ（ン）～トヤラ（ン）」の例示用法の例である。

(25) 長「むむそれもたしか噂に聞た荒川淵右え門とやら。菅家の一軸紛失もきやつ等が仕業とおもふたゆゑ

波「あの船頭の市どのが全六さんとお侍が。唄きあふた嘶のうち。菅家とやら一軸  
とやら。たしかに聞たとわたしへ嘶」 (明鳥後の正夢・四編巻之十一 1824)

(25) は、市どのから聞いた話に出てきた言葉の例として「菅家」「一軸」を挙げる例示用法である。

#### 2-5-2-3 伝聞用法

近世後期には、「～トヤラ（ン） 何トヤラ（ン）」に伝聞用法が見られるようになる。

(26) 東 こりやあちつとおせへよふ

安 そんならお歌さん一寸とおあゐとやら何とやら

歌 こりやあもふお見立て迷惑いたしみす

(深川新話 1779)

(27) おなしみせの小花が本町せんだの木ばしのごふくやのむすめ。それに豊与のやを  
が江戸のきんじよのかな川とやらなにとやらいふたけれどもわすれました。おな  
しみせに名歌といふちいさいおやまがある。 (北華通情 1794)

(28) 影ぼしとやらなんとやら、今此ごとく軒に釣さげられ、やせおとろえし此身のう  
へ。 (落嘶屠蘇喜言 15. 218・1824)

(26)～(28)の「Aトヤラ（ン） 何トヤラ（ン）」はAについてはっきりと分からぬ  
いという「話者自身が直接はっきりとは知らないが、聞いたことがある、見たことがある  
といった不確定的な意味」<sup>64</sup>の伝聞表現である。

### 3. おわりに

以上の考察のまとめとして、各資料における「ヤラ（ン）」と「トヤラ（ン）」の意味用法別の用例数を表1に示す。

まず、「ヤラ（ン）」による並列形式は、中世前期に疑問用法として出現し、近世前期までこの用法でよく使用されている。中世後期になると、候補を挙げる用法が一時的に見られるが、ごくわずかである。近世には例示用法が発生し、近世を通して「ヤラ（ン）」の中心的な用法になっていた。

次に、「トヤラ（ン）」による並列形式は、近世前期から見られる。初出例は候補を挙げる用法であり、近世期を通して、この用法で使用され続ける。例示用法への拡張も見られるが、用例数が少ない。

以上のように、「ヤラ（ン）」と「トヤラ（ン）」には役割分担があったと見られる。前

<sup>64</sup> 岩田（2014）における伝聞用法の定義による。

者は早い時期に疑問用法を中心に使用され、後者はやや遅れて候補を挙げる用法を中心に使用された。通時的に見ると、「ヤラ（ン）」は疑問用法から例示用法へと中心が移ったのに対して、「トヤラ（ン）」は長期にわたって候補を挙げる用法が中心となり、例示用法への展開は限定的であった。

表1 各資料における「ヤラ (ン)」「トヤラ (ン)」の意味用法

	疑問		候補		伝聞		例示	
	ヤラ (ン)	トヤラ (ン)	ヤラ (ン)	トヤラ (ン)	ヤラ (ン)	トヤラ (ン)	ヤラ (ン)	トヤラ (ン)
万葉集(700年代)	0	0	0	0	0	0	0	0
源氏物語(1001~1010頃)	0	0	0	0	0	0	0	0
平家物語(中世前期)	2	0	0	0	0	0	0	0
中華若木詩抄(中世後期)	4	0	1	0	0	0	0	0
醒睡笑(1623)	1	0	0	1	0	0	0	0
昨日は今日の物語(整版九行本)(1636)	1	0	0	1	0	0	0	0
一休闐東咄(1672)	0	0	0	1	0	0	0	0
五十年忌歌念仏(1707)	0	0	0	0	0	0	0	1
淀鯉出世滝徳(1708)	0	0	0	0	0	0	3	0
夕霧阿波鳴渡(1712)	0	0	0	1	0	0	0	0
長町女腹切(1712)	4	0	0	0	0	0	3	0
山崎与次兵衛寿の門松(1718)	0	0	0	1	0	0	1	0
心中天の網島(1720)	0	0	0	1	0	0	1	0
陽台遺編・姫閣秘言(1758)	0	0	0	1	0	0	0	0
鹿の子餅(1772)	0	0	0	2	0	0	0	0
南閨雑話(1773)	0	0	0	3	0	0	0	0
深川新話(1779)	0	0	0	1	0	2	0	0
総籬(1787)	0	0	0	1	0	0	0	0
北華通情(1794)	0	0	0	0	0	1	0	0
南遊記(1800)	0	0	0	1	0	0	2	0
馬鹿大林(1801)	0	0	0	1	0	0	0	0
笑の友(1801)	0	0	0	1	0	0	0	0
福山椒(1803)	0	0	0	1	0	0	0	0
花競二巻漸(1814)	0	0	0	1	0	0	2	0

身振嘶寿賀多八景(1814)	0	0	0	1	0	0	0	0
明鳥後の正夢(1821～1824)	2	0	0	2	0	0	1	1
箱まくら(1822)	0	0	0	1	0	0	0	0
落嘶屠蘇喜言(1824)	0	0	0	0	0	1	0	0
仮名文章娘節用(1831～1834)	1	0	0	1	0	0	1	0
春色梅児与美(1832～1833)	0	0	0	1	0	0	2	0
春色辰巳園(1833～1835)	0	0	0	1	0	0	2	0
花廻志満台(1836～1838)	0	0	0	2	0	0	0	0

## 終 章

### 1. 本研究が明らかにしたこと

最後に、本研究の中心的な考察対象であった並列形式「トカ」「トヤラ（ン）」の時代別の意味用法の特徴を表にして比較することで、本研究が明らかにしたことの概要をまとめおきたい。

表1 各時期における「トカ」「トヤラ（ン）」の意味用法

	トカ	トヤラ（ン）
中世後期	選言	なし
近世前期	選言、疑問、例示	候補、例示
近世後期	例示、伝聞、候補	候補、例示、伝聞
明治期以降	例示、伝聞、候補	候補、例示、伝聞

「トカ」の二つ（以上）の要素を挙げる用法は中世後期に出現する。発生初期（中世後期～近世前期）には、「A トカ B トカ」「A トカ B トコソ」の形式の選言用法、そして、「A トカ B トカ」の形式の疑問用法が見られる。近世前期においては、「A トカ B ナドトコソ」のような「ナド」を加えた形式が見られ、AとB以外の要素が存在することを表すようになる。中世・近世前期の「トカ」の例には、何かを選んだり、変更したり、決定したりする際の例を挙げる文脈で使用されたものが多い。例示用法は、一語化が成立する前の近世前期に出現していたと考えられる。つまり、引用的な性質を維持しつつ意味的に例示に使用されていた時期があり、その後、引用から完全に脱却し、純粋な例示形式に発展した。近世後期においては、「A トカ B トカ+N」の形式で、Nの例としてA、Bを並べる例示用法と、「A トカ B トカ」形式で、候補を挙げる用法がほぼ同時期に見られるようになる。この候補用法は、例示用法と同じく、AやB以外の要素の存在が考えられる。明治期以降は、例示用法の用例が多く見られるようになり、定着した。そして、「A（肯定形） トカ（否定形） トカ」の形式で不確実性が強く噂にすぎないことを表す伝聞用法も見られるようになる。

「A トヤラ（ン） B トヤラ（ン）」の形式の並列用法は、近世前期前半から見られるが、この時期はまだ引用由来の用法が残存しており、引用から離れた例と共存していた。また、意味的には候補を挙げる用法が中心であった。近世前期後半になると、引用から離れ、候補を挙げる用法が中心となる。また、例示用法がごくわずかに見えはじめる。近世後期も、

候補を挙げる用法が中心であるが、「A トヤラ何トヤラ」という新しい形式が登場する。例示用法も見られるが、まだ少ない。明治期には、「トヤラ（ン）」自体が衰退し、明治後期以降は候補を挙げる用法の例はほぼなくなる。例示用法の例は見られるが、少数である。

「A トカ何トカ」形式の伝聞用法は「A トヤラ何トヤラ」と同じく近世後期から見られるようになる。用法の発生順序から推定すると、「A トヤラ（ン） B トヤラ（ン）」のはつきりと分からぬものの候補を挙げる用法から「A トヤラ何トヤラ」が派生し、それが「A トカ何トカ」を通して「A トカ B トカ」にも候補を挙げる用法が生じた可能性がある。

並列形式「トカ」と「トヤラ（ン）」における例示用法発生の経緯に関して共通する点として、「はつきりと分からぬものの候補」を挙げるという不確実の用法との関連性もあると考えられる。候補の用法は不確実だが、AやB以外の要素の存在が考えられる。これは例示の発生にも影響を与えたと考えられる。「トヤラ（ン）」は「候補→例示」への拡張がはつきりと見られる。「トカ」は「候補」の用法が見られる前の段階で、例示と思われる用法が見られたが、「A トカ B トカ+N」の形式で、Nの例としてA、Bを並べる例示用法はまだ見られない。即ち、例示用法として定着していない。「A トカ B トカ+N」形式の用法は「候補」を挙げる用法とほぼ同時期出現することは、「候補」を挙げる用法から影響を受けた可能性がある。

## 2. 補説—「トカ」「トヤラ（ン）」の単独用法について—

(1) 同じくイヴの伝記に関係があると確信しているけれど、おおぜいの視線やひそひそ話を我慢し、クライドとかいう人のことでちょっと厄介な口喧嘩をしていた、ふたりのすごい美人のあいだに割って入ったの

(『愛と哀しみのメモワール』ノーラ・ロバーツ(著)/岡田葉子(訳)扶桑社 2004)

(2) ああ、報告は聞いた。何が問題だ？その美術講師とやら、捜査員が踏み込む前に農薬を飲んだんだろう？

(『半落ち』横山秀夫・講談社 2002)

本研究は「トカ」「トヤラ（ン）」の並列用法を中心に考察を行ったが、ここでは、単独用法についても少し触れたい。

(1) (2) のような「話者自身が直接はつきりとは知らないが、聞いたことがある、見たことがあるといった不確定的な意味」<sup>65</sup>という伝聞用法の「トカ」「トヤラ（ン）」は古代から現代まで確認できる。

現代語において、単独用法の「トカ」は例示用法が見られるが、例示であるか伝聞であるかは判断しにくい場合がある。以下の(3)～(5)の「A トカ N」の形式の用法はNの意味を参照し、例示用法であることが考えられる。

<sup>65</sup> 岩田（2014）における伝聞用法の定義による。

(3) では、「ナイフ」は「いろんなもの」の具体例の一つで見ることができる。具体例の部分を省略しても、「洋服がいろんなもので破ける」のように、文の意味はほとんど変わらない。(4) では、「雨で外に出られないとき」は「いろんなとき」の具体例の一つで見ることができる。具体例の部分を省略しても、「いろんなとき、この図書室は、みんなの集会所にもなった」のように、文の意味はほとんど変わらない。(5) では、「無菌状態で飼育する」は「建物の中で人工的にコントロールする方法」の具体例の一つで見ることができる。具体例の部分を省略しても、「建物の中で人工的にコントロールする方法が主流になりつつあり、小規模の飼育では採算が合わなくなってきたのだという」のように、文の意味はほとんど変わらない。

(3) 洋服が、ナイフとか、いろんなもので破けるのは、わかるけど、どうして、パンツまで、毎日、毎日、ジャキジャキになるの？

（『窓ぎわのトットちゃん』黒柳徹子・講談社 1981）

(4) そして、それからは、雨で外に出られないときとか、いろんなとき、この図書室は、みんなの集会所にもなった。

（『窓ぎわのトットちゃん』黒柳徹子・講談社 1981）

(5) ニワトリだけでなく、ウシ、ブタ、ヤギなどの家畜も、この十数年の間に農家の庭からつぎつぎに姿を消していった。無菌状態で飼育するとか、建物の中で人工的にコントロールする方法が主流になりつつあり、小規模の飼育では採算が合わなくなってきたのだという。（『風といっしょに』いわむらかずお・理論社 2002）

伝聞用法について、(6) (7) では、「A トカイウN」の形式で、物または人の名前を述べている。「はっきりと分からぬ」の意味を表している。(8) (9) は「トカ」が文末に位置する伝聞用法である。

(6) 大目にねえ、しかし、われわれ事務方は、そのダブル・チェック・システムとか、いいうものの具体的な説明を聞かせて貰わねば、そう簡単に見過すわけにはいかないね、来春、西行の店舗新設を審査する時、われわれとしては、もしかしてこの問題を考慮に入れるかもしれない（『華麗なる一族』山崎豊子・新潮社 1973）

(7) 警部さん、私はもう何が何だか…今のアツキとかいう名前にお聞き覚えは？

（『時の誘拐』芦辺拓・立風書房 2001）

(8) おねえちゃんが光枝ちゃんで、あんたが良枝ちゃんや。ようお越しやす。たしか東京で一緒にならはったとか。

（『オリヲン座からの招待状』浅田次郎・集英社 1997）

(9) 朝鮮人はちりぢりになって逃げた。峠越えをあきらめ、ふたたび町にもどった人

以上の例示用法と伝聞用法は並列形式の「トカ」にも見られる。並列用法に見られない、単独用法だけ見られる用法は滝（2020）が述べている「話者の経験や考えをもとに明示した1つの事物が典型例となるような典型例を中心とするカテゴリーを聞き手に想起させ、それ以外にも例が存在するように示すことで、明示した事物の印象を弱める（=（10））」「話題となる状況で、典型例を中心とするカテゴリーの周辺例として、ある事物を明示し、話者の経験から想定しやすい典型例が存在することを示すことで、並列的に設定された典型例との比較から明示した事物がありえないことであることを表す（=（11））」「話題となる特徴をもつものの顕著例を中心とするカテゴリーの顕著例として聞き手にとって新情報となるある1つの事物を主題として明示し、同時に実現されうるそれ以外の例が存在するように示すことで、明示した事物の特徴を際立たせる（=（12））」用法がある。滝（2020）は（10）について、「著者の男性の髪を見た話者が、自らの考えから「髪染め」を提案する文脈において「トカ」を用いている。著者の男性は気にしていない様子ではあるが、一般的にはセンシティブといえる話題に対する提案に「トカ」を用いることにより、聞き手は「髪染め」という典型例を中心とした「白髪への対処」というカテゴリーを想起するため、「髪染め」という案が気に入らなければ他の案もあるというように思わせることができる。その結果、1例しか挙げていない「髪染め」という案の印象が弱まると考えられる」と説明している。（11）について、「オリンピックの重量挙げでの三宅選手の成績に対し「トカ」を用いている。それにより、ヘルニアを患っている選手の成績として想定する典型例が想起される。そのカテゴリーの中の周辺例として銅メダルという実現が困難で想定しにくい結果を位置づけることで、自分の想定した成績と比較してそのありえないと考えていた結果が実現したことへの驚きを表している」と説明している。（12）について、「「渡る世間は鬼ばかり」というドラマの中では事件がよく発生することを指摘した相手に対し、殺人事件が発生するドラマやアニメというカテゴリーの顕著例として「名探偵コナン」というアニメを明示している。「トカ」により、殺人事件が発生する他のドラマやアニメの存在が示されるが、それらとの比較から、「名探偵コナン」の事件発生件数が多いという特徴をより際立たせている」と説明している。

(10) <sup>66</sup>最近、というか今の会社に転職してからというもの、一貫して白髪が増え続けている。全く不思議だ。（中略）前のほうに集中はしているが。髪染めとかは考えないの？とも言われることはあるが、全く考えていない。このままで問題ないと思うんだ。多少、苦労しているように見えるし（笑）（Yahoo!ブログ）

(11) 三宅宏実選手ヘルニアで、銅メダルとかすごすぎるから私も何でもできる気が

<sup>66</sup> (10)～(13)の用例は滝（2020）による。引用に際して例文番号を変更した。

- してきた (https://twitter.com/naaan\_ha)
- (12) 渡る世間って事件起き過ぎじゃないですか?  
それを言ったら、コナン君とか、身近で殺人事件起きすぎですね～。  
(Yahoo!知恵袋)

(6)～(9)のような引用と関係のある単独用法は伝聞用法であり、例示用法にならない。発話の例を挙げる例示用法は(13)のような並列用法が必要と考えられる。そして、引用との関係が見られない用法は(3)～(5)のような例示用法と(10)～(12)のような例示にならない用法があるため、並列形式の「トカ」を使うことで、意味の混乱を避けることができる。

- (13) では、「日本はまだ貧しい」とか、「日本はどうして大したもんだ」とか言はないで、問題をそんな風に大きくしないで、ただ、「お茶漬は実にうまいもんだ」とだけ言つたらどうだらうか? 『三島由紀夫全集』三島由紀夫・新潮社 2003)

### 3. 今後の課題

本研究では、「トカ」「トヤラ(ン)」「ヤラ(ン)」による並列表現について考察したが、それは並列全体から見れば、ごく一部にすぎない。そこで、以下のようなことを今後の課題としたい。

まず、本研究の結果を並列表現全体の体系の中に位置づけなければならない。そのためには、並列表現の体系に対する見通しをもつことが必要となるが、今の筆者にはまだその力がなく、これは今後の課題としたい。

「トカ」「トヤラ(ン)」「ヤラ(ン)」は、複合的な並列形式である。複合的な並列形式には、ほかにもいろいろある。まず、本研究と近い位置にあるものとして、(14) (15)のような、「～タリトカ～タリトカ」がある。

- (14) 林 休みの日は何されているんですか。  
米倉 プresteやつたりとか、台本読んだりとか。雑誌で映画の連載をやってるから、映画のビデオを見たりとかですね。  
(『週刊朝日』大波綾/林真理子/米倉涼子・朝日新聞社 2003)
- (15) うちの学校には、すっごい問題児がいます。大変で、友達の耳に、石を入れてあそんでたりとか、普通に万引きしてたりとか、いっぽい悪いことをいています。  
(Yahoo!知恵袋 2005)

そのほかにも、(16)のような、間投詞「ノ」+引用の助詞「ト」からできた「～ノ～

ノ+ト」や、(17) のような、断定の助動詞「ダ」+間投詞「ノ」+引用の助詞「ト」のからできた「～ダノ～ダノ+ト」がある。また、(18) のような、引用の助詞「ト」+発話動詞「言ウ」からできた「～トイイ～トイイ」もある。さらに、(19) のような、引用の助詞「ト」+発話動詞「言ウ」+否定の「ナイ」からできた「～トイワズ～トイワズ」もある<sup>67</sup>。

- (16) もしその駐車場にしっかりした整理係がいて、両者の喧嘩を調停してやるとか、全体的に詰めさせて二台分のスペースをつくってやるとかしていたら、呪うの殺すのというところまでは行かなかつたんじゃないかな

(『意味』清川悠山・日本文学館 2003)

- (17) これは、当時の、どの藩でも同じことで、今までのよう、禄高だの家柄だのと言つてはいられない。 (『誠の旗がゆく』池波正太郎・集英社 2003)

- (18) ここはアメリカなんだし、アメリカらしさにおいてはまさにアムトラックほどアメリカ的なものはない。そののんびり加減といい、大きさといい、イージーさといい、何もかも。 (『世界は幻なんかじやない』辻仁成・角川書店 2001)

- (19) 古代の東洋では、思想書といわづ詩といわづ、別に区分けしなくとも同じ世界の雰囲気があり、老子に詩があれば詩には老子があるというよう、肩肘はらないですむところがいい。 (『中野孝次の生きる言葉』中野孝次・海竜社 2003)

こうした表現に考察対象を広げていくことも今後の課題としたい。

---

<sup>67</sup> 「～ノ～ノ」「～ダノ～ダノ」の研究には手塚（1968）や岩田（2007）が、「～トイイ～トイイ」の研究には京（2020）が、「～トイワズ～トイワズ」の研究には京（2022）がある。

## 参考文献

- 岩田美穂 (2007) 「例示を表す並列形式の歴史的変化—タリ・ナリをめぐって—」『日本語の構造変化と文法化』ひつじ書房
- 岩田美穂 (2007) 「「ノ・ダノ」並列の変遷—例示並列形式としての位置づけについて」『語文』89 大阪大学国語国文学会
- 岩田美穂 (2010) 「並列表現形式の史的展開：その体系的把握を目指して」博士論文、大阪大学
- 岩田美穂・衣畠智秀 (2011) 「ヤラにおける例示用法の成立」『日本語文法』11(2) 日本語文法学会
- 岩田美穂 (2014) 「例示並列形式としてのトカの史的変遷」『日本語複文構文の研究』ひつじ書房
- 岩田美穂 (2021) 「並列表現」『日本語文法史キーワード辞典』ひつじ書房
- 小田勝 (2015) 『実例詳解古典文法総覧』和泉書院
- 衣畠智秀 (2007) 「付加節から取り立てへの歴史変化の2つのパターン」『日本語の構造変化と文法化』ひつじ書房
- 衣畠智秀・岩田美穂 (2010) 「名詞句位置のカの歴史—選言・不定用法を中心に—」『日本語の研究』6(4) 日本語学会
- 京健治 (2014) 「並列助詞「なり」成立の経緯再考」『岡大国文論稿』42 岡山大学言語国語国文学会
- 京健治 (2016) 「接続助詞「たり」の展開覚書—江戸期の用法を中心に—」『国語と教育』41 長崎大学国語国文学会
- 京健治 (2020) 「並列表現形式の生成・展開に関する考察—並列表現「…といい…といい」の展開素描—」2020年度岡山大学言語国語国文学会・2020年11月28日（土）口頭発表
- 京健治 (2022) 「「AといわずBといわず…」構文の成立と展開小考」2022年度岡山大学言語国語国文学会・2022年12月17日（土）口頭発表
- グループ・ジャマシイ編 (1998) 『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版
- 此島正年 (1966) 『国語助詞の研究—助詞史の素描—』桜楓社
- 鈴木重幸 (1972) 『日本語文法・形態論』むぎ書房
- 高宮幸乃 (2004) 「ヤラ(ウ)による間接疑問文の成立—不定詞疑問を中心に—」『日本語学文学』15 三重大学日本語日本文学
- 滝理江 (2020) 「例示の機能をもつ助詞の意味分析—認知言語学におけるカテゴリーの観

- 点から一」博士学位論文 名古屋大学大学院
- 沈茅一 (1996) 「「やら」についての一考察」『ことばの科学 7』言語学研究会
- 沈茅一 (1997) 「並立の場合に使われる「とか」の意味・用法」『語学教育研究論叢』14 大東文化大学語学教育研究所
- 辻本桜介 (2024) 「中古語のトカ・トカヤ・トカハについて」『日本文芸研究』75(2)関西学院大学日本文学会
- 手塚知子 (1968) 「並立助詞「の」から「だの」へ-上接する異なる要素の相互干渉による変遷-」『言語と文芸』10(4)国文学言語と文芸の会
- 寺村秀夫 (1991) 『日本語のシンタクスと意味III』くろしお出版
- 中俣尚己 (2015) 『日本語並列表現の体系』ひつじ書房
- 橋本進吉 (1948) 『國語法研究』岩波書店
- 蜂谷清人 (1977) 『狂言台本の国語学的研究』笠間書院
- 藤田保幸 (2000) 『国語引用構文の研究』和泉書院
- 森田良行 (1989) 『基礎日本語辞典』角川書店
- 森山卓郎 (1995) 「並列述語構文考ー「たり」「とか」「か」「なり」の意味用法をめぐってー」『複文の研究 (上)』くろしお出版
- 森山卓郎 (1997) 「「うどんにマヨネーズかけたりして」--並立の意味 (特集 例解日本語文法--「魚は鯛がいい」～「愛だろ, 愛っ。」)」『言語』26(2)大修館書店
- 森山卓郎 (1998) 「例示の副助詞「でも」と文末制約」『日本語科学』3 国立国語研究所
- 山口堯二 (1990) 『日本語疑問表現通史』明治書院
- 湯沢幸吉郎 (1970) 『室町時代言語の研究』風間書房
- 渡辺実 (1971) 『国語構文論』塙書房

<使用コーパス>

- 国立国語研究所 (2024) 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(バージョン 2021.03, 中納言バージョン 2.7.3) <https://clrd.ninjal.ac.jp/bccwj/> (2025年5月1日確認)
- 国立国語研究所 (2025) 『日本語歴史コーパス』(バージョン 2025.3, 中納言バージョン 2.7.2) <https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/> (2025年5月1日確認)